物産寶庫

甲 十四

鑛物類 天

合

A 00
5765

東京大学総合図書館

八九二

金剛石説

一塊ノ片石ニメ寶石ノ貴名ヲ称スル者アリ其石ノ本性ニ就テ之ヲ視レハ平凡ノ畾石ニ異ナラス而メ其人ニ會ヘハ至貴ノ重寶トナルハ何ツヤ或ハ其世ニ稀有ナルト或ハ色澤ノ愛玩スヘキト或ハ光彩ノ粲然タルト或ハ其質ノ至剛ナルトニ由ル玉工ハ其磨琢シテ精美ニナスヘキ質ニ就テ之ヲ精石ト称シ金石学家ハ玻璃剛鐵等ノ如キ至堅ノ物ヲ能ク劃ルニ由テ之ヲ剛石ト称ス就中金剛石ハ寶玉ノ王ニメ能ク諸物

博物篇

NO.14
A00 5765
東京帝國大學圖書之印
B 45222
男爵田中美津男氏寄贈 先代田中芳男男旧蔵書 昭和七年
東京大学総合図書館

ヲ剗リテ諸物能ク之ヲ剗ル者絶テナキノ至剛
石ナリ此篇ハ世間有名ノ寶石ノ傳ヲ略説セン
ト欲ス而メ先ツ其未タ琢磨ヲ経サル璞ヲ略説
セン

高名ナル金剛石ニ就テノ傳説ハ世ニ行ハルヽ
者鮮ナカラス其新紙ニ出ル者亦多シ而メ其寶
石ノ眞ノミナラス殊ニ其量ノ軽重價ノ高下ニ
至リテハ諸説紛々一定スルヿナシ然ルニ前一二
年ニ在テ温故学士ノ「セ゚井キング氏寶石ヲ論ス
ル一要書ヲ著ス之ヲ簒メ寶石傳ト云フ今予カ
此ニ掲ル所ノ有名ナル金剛石ノ傳説ハ専ラ此
書ヲ抜録スル者ナリ

「アダマス」ハ金剛寶石ノ希臘(ゲレシヤ)国ノ名ナリ然共希(ゲレ)
臘(シヤ)ノ古記ヲ考フルニ上世ハ「アダマス」ノ語ヲ以
テ絶テ寶石ヲ称セス但當時専ラ兵器及其他ノ
器具ニ用ヒシ響銅(ブロンス)」ヨリ剛キ所ノ至剛ノ金属ノ
名トナセリ古語ノ「アダマス」鍋(アダマンテーンナーン)ハ其証ニメ「プロ
メテウス」氏ノ煮ラレタル鍋ハ即チ是ナリ後世
ニ至ルニ及ンテ此語ヲ以テ當時ヘカメートン及ヒ
嵌玉(インタグリーン)等ニ用フル所ノ「サルデー子ン」石名アガート

石名等ヨリ剛固ニメ彫刻ニ難ナル一石ノ名トナセリ故ニ「テオハラスチュス氏ハアダマスノ語ヲ敢テ寶石篇内ニ採ラスメ唯之ヲ焚ケサル物ト見做シテ炭類篇内ニ掲ケタリ「マニリウ氏ニ至リテ此語ヲ以テ初メテ良金剛石ノ名トナシテ其鑑定ノ首徴石體ノ大小價格ノ高下ヲ併論セルノ書アルヲ見タリ」

詩ニ曰

蓋シ此詩人ハ「アウギュスチュス時代ノ末年ニモ世ニアリシ人ナリ

又金剛石ハ欧洲ト印度南地ノ人トノ間ニ往来交通ヲナサヽル前ニハ欧人ノ能ク之ヲ知ル者ナシ然共古人之ヲ知ルヤ即チ寶石ノ最上等ニ置キテ以来寶玉ノ冠トナリテ彼タ等ヲ下ルヿアルナシ「金剛石ハ諸酸類ニ溶ケ溷ケス而メ其質ノ固硬ナルハ諸物ノ上ニ出ツ故ニ之ヲ琢磨スヘキ物ハ唯同石粉アルノミ此寶石ノ高價ナルハ琢磨ノ勞蓋シ其半ニ居ルニ由ル抑金剛石ハ注意メ之ヲ磨スレハ其角面能ク光線ヲ各方ニ折シテ諸角ヲ作リ石内ニ多色ヲ現ス就中三

角玊（リスマ）ノ本色ナル赤青黄之カ首色ヲナセリ蝋燭
ノ火光ハ此色變ヲ現ハスニ尤モ適セリトス謂
フニ金剛石ノ殊ニ貴婦ノ装飾ニ専用ナルハ眞
ニ驚クヘシ
崑吾石ハ通常無色澄明ニメ水ノ如シ故ニ点精
美ノ品ヲ「エヽルステワトトル」ノ石ト云然共稀
ニ有色ノ者アリ其青ナル者ハ「サヒール」ノ如ク
玫瑰苍色ノ者ハ「ロベイン」石ノ一種ノ如ク赤者
ハ石榴（ガラナート）石ノ如ク黄ナル者ハ「トパース」ノ如ク菫
紫ノ者ハ「アメチス」石ノ如クナルヲ以テ多ク之
ニ混淆ス是ヲ以テ崑吾ハ毎ニ無色ノ者ヲ多シ
トス又黒色ニメ澄明ナラサル者アリ「ブラシリ
ー国ニ於テ「カルボナド」ト名ク方今「カルボナー
ト」ト称メ販品ニアル者ニメ真状殆ント一小片
ノ炭塊ノ如シ寶玉家ハ此黒崑吾ヲ用ヒス然共
工人ハ用ヒテ各色ノ用ニ供ス就中之ヲ以テ鑛
坑錐尖ニ装シ又石榴石「ポルヒール」等ノ如キ堅
石錐孔ノ用ニ供ス
金剛石ハ河砂ノ如キ流土（アルリユビヨーン）ヲ洗滌淅汰スルニ由
テ採ルナリ「ブラシリ國」ニテハ「カスカロ」圓礫ト云義

ト名ツル細砂埴土ヲ河中及ヒ地皮層ノ昆吾ヲ含ム者ヨリ桶内ニ取リ流水ニテ洗淘スル毎桶黒奴一人ヲ附ス以テ水砂ニ就テ崑吾ヲ探求ス一石ノ重十七カラートヨリ半以上ノ者ヲ得ル黒奴ハ主翁ノ覊絆ヲ免レテ解放自由ノ者トナルヲ得ルナリ

金剛石ヲ琢磨スルニハ金剛石末ヲ用フ此法ハ千四百五十六年「ブリュフヘ」地名ニ於テ「ベルキュエム」氏之ヲ創見シ之ニ次テ「ベルゲン」地名ヤーコブ氏モ亦之ヲ發明セリ方今ハ此工業専ラ「アムステルダム」地名ニアリ其法ハ鉄臂ノ類アリ粗璞ヲ此臂ニ固定シ之ヲ扁圓器(シチーフ)上ニ壓ス扁圓器ニハ金剛石末ヲ撒布シ滊力ヲ以テ神速ニ之ヲ圓轉ス或ハ一方ヲ磨スルニ數時ノ工ヲ費スコトアリ金剛石ヲ磨シテ為ス所ノ玉形三種アリ「ブリリアント」「ロートセン」「タートヘルス」是ナリ「ブリリアント」ハ其最上面ハ正中ニ八角面ヲナシ其角ヲ周リテ各面アリ其高廣ハ平等ナルカ故ニ之ヲ作ルニハ大石ヲ要ス小石ハ「ロートセン」ヲ作リ最薄石ハ「タートヘルス」ヲ作ル「ロートセン」ノ最上面ハ其正中

ニ小八角面ヲ磨シ之ヲ周リテ三角面八箇ヲ作ル之ニ次ニ小机面(トラペヂウム)八面ヲ作リ又之ニ次テ三角十六面ヲ作ル其下面ハ正中ノ小八角ヨリナリ八机面之ヲ圍抱シテ以テ其八角ニ応ス此机面ハ突出セル一角ニ由テ不等五角ト二重三角ニ分ツ「タ「フル石ハ金剛玉中ニアリテ下品ノ形ニメ至薄ノ石ヲ磨メ之ヲ作ル其正中ニ一方面アリ四角面ニ行或ハ數行ニテ圍抱メ以テ其角方ニ応ス

金剛石ノ小者ハ玻璃ヲ截ルノ刀トナス之ニ用フル者ハ専ラ天生ノ晶芒ヲ用フ其石面曲勾不平ナル者玻璃刀トナスニ宜シ金剛石粉ハ攻玉家截石工等之ヲ以テ他物ヲ磨琢ス金剛砕片ハ寶石類ニ孔ヲ穿チ或ハ儀歯其他ノ硬物ニ孔ヲ穿ツノ小錐トナシ用フ

金剛石ノ本性ハ何物ナルヤ答曰些少ナル醇精ノ炭素ノ結晶セル者ニメ澄明ナル石炭ノ一種ナリ今試ニ之ヲ玻璃鐘内ニ置キ酸素瓦斯ヲ盈テ火珠ノ火點ヲ晶上ニオケハ金剛ハ焼ケテ烏有トナル而メ后其鐘内ニ遺ル所ノ物ハ何物ソ

曰炭酸ナリ即チ目ニ不可視ミルベカラサル瓦斯ニ〆酸素ト
炭素ノ合物ナリ此試法ハ早ク已ニ「ラホイシール
氏ハナセシ所ナリ此試法ヲ「ヒロソヒー」ノ點ヨ
リ論スレハ萬金ノ寶玉ヲ空ニ化〆一縷ノ烟ト
ナス拚和ノ歎ナシトセス故ニ古詩ニ云 呼嗚至
寶ノ飾物ヲ失フ

金剛ノ價格ハ其量ノ軽重ニ據ル而〆其量秤ヲ
名ケテ「カラート」ト云「カラート」ハ印度語ノ「キユア
ラ」ノ変ニ〆豆名ナリ古昔金剛ヲ秤ルニハ此豆
ヲ用ヒシヨリ来ル故ニ磨琢セル金剛ノ價ハ其
量ノ軽重ニ従フテ「カラート」ノ名ヲ用フ其法ハ
金剛ノ量ニ「カラート」ヲ二倍シ其方面ニ二十四
牛尓甸ヲ乗スルナリ故ニ一「カラート」ノ石價ハ
九十六牛ニ〆四「カラート」ノ石價ハ千五百三十
九牛十「カラート」ノ石價ハ九千六百牛トナル其
石量二十「カラート」以上ニ至リテハ其價格飛騰
シテ此法ニ據ラス右ニ班アリ或ハ瘖翳アル者
ハ些微ノ班翳ト雖其價格大ニ降ル又其未タ琢
磨セサル者ノ平均ノ價格ハ一「カラート」ノ者ヲ二
十四牛トシ二「カラート」ノ者ヲ九十六牛トス是

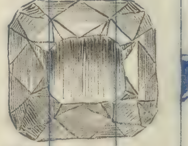
東京大学総合図書館

レ其琢磨ニ由テ殆ント半量ヲ減スレハナリ
金剛石ハ特リ高人貴客ノ飾具ナル所以ハ其價直ノ高貴ナルヨリメ明ニメ而メ其之ヲ藏ムルニ盗奪ヲ防クノ嚴密ナルノ所以モ亦是ニ由テ明ナリ英國王冠ノ金剛石ハ三重鎖閉ノ寶庫ニアリ嚴守如此クナルモ盗ノ狡猾ナル猶易々之ヲ盗奪スヘシ然共亦其再ヒ本主ニ復ルモ遠カラサル者ナリ其例ハ一千七百九十二年佛國最初ノ共和政治（レピュブリーキ）ノ時盗アリテ佛國ノ冠玉ヲ盗ム後官其一二玉ヲ得是レハ無名ノ束アリ其所在ヲ告ク是ニ由テ其地ヲ堀リテ之ヲ得タリ其後ナホレオン第一世ノ時其他ノ冠玉皆出テ國庫ニ收マルニ至レリ

玆ニ今天下ニ有名ナル金剛石寶ヲ揭ケ說ント欲ス故ニ先ツ「レゲント」寶石ヲ說クヘシ抑レゲント寶石ハ其大ニ至リテハ之ニ輸ル者アルモ其質ノ精美ナルト其琢磨ノ精巧ナルニ至リテハ天下能ク之ニ及フ者ナカルヘシ此石ノ名号ハ路易第十五世ノ未及成期（ミンデルヤーリフヘイト）年ノ時オレアンス国名候「レゲント」神官ノ如キ職名タリシ日買得タル者ナルニ

由ル其重ハ百三十六カラートト八分ノ七量アリ其價ハ六百万牛ギユナリ或ハ云其真價格ハ二百万牛ナルヘシト然共之ヲ折中シテ四百万牛トナサハ其實價ヲ得タリトセン如此クナルモ其品ハ唯一塊石ト見レハ喫驚スヘキ貫格ト云ヘシ其未タ琢磨ヲ経サル璞玉タルノ時ニ在テハ其重量ハ四百十「カラート」ヲ秤セリピツト氏之ヲ價客ノ雜寶中ヨリ一万二千五ホンドステルリング即チ大概十五万牛ニテ買ヒ之ヲ琢磨シテ十全無鉄ノ「ブリリアント」トナスニ二ケ

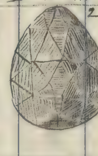
年ノ時間ヲ費セリ其工料ハ五千ホンドステルリング即チ九万牛トナレリ是ニ於テオレアンス候ハ之ヲ十三万五千ホンドステルリング即チ六十二万牛ニ買ヘリ之ヲ磨キテ「ブリ」アント」トナサントスル時砕砌セル石片ノ價三四千ホンドステルリング」トナレルヲ以テ琢磨ノ料ハ殆ント贖フニ至レリ蓋シ此寶石ハ「ゴルコンダ」地名ノ南十時程ニアル「パルテアル」地ヨリ来レリ



其次ハ「デザレシー」ナリ此寶石ハ千四百七十五年ニグランソン」ノ戰爭ニ「カーレルデンストウレ」(王名)ノ兜鍪ヨリ脱落シ「ズヰットセル綱ノ一兵卒之ヲ捨取メ亿ツ一牛許ノ價ニテ之ヲ一僧ニ賣リタルヿハ口碑ニ傳フト雖其後ノ所在ヲ知ル者ナシ千五百八十九年ニ蒲萄牙王「アシトニド(王名)ノ所藏ナルヿ方纔テ世ノ知ル所トナリ此王貧ニヨリテ之ヲ佛商ニ十万牛ニ賣却シ此商ヨリシテ又貴人「デザレシー」ナル者ノ手ニ落チタルヲ以テ後世「デザレシー」ヲ以テ玉ノ名トナセリ千六百八十八年ニ至リテ英ノ退王(オントロオンデン)ヤーコブ第二ノ所有トナリシモ亦貧ノ為ニ路易第十四王ニ二万五千ホンドステルリンク即チ三十万牛ニ賣与シ路易第十五王ニ至リテ初テ之ヲ冠ニ装シタリ此玉形ハ「ペール(梨實)状ナリ千七百九十二年ニ佛国王庫ノ寶石類紛失ノ時共ニ盗ニ奪ヒ去ラル其後復タ世ニ出テ王族「デシドフ(人名)ノ

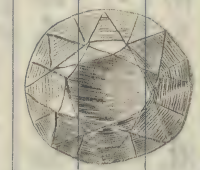
有トナレリ
其次ハ南極星ナリ此石ハ千八百五十三年「ブラシリ国名ニ於テ一黒奴之ヲ得テハルヘレ君ニ賣リ同氏琢磨メ世寶トナセリ其璞ハ二百五十四カラート半ヲ秤セリト

南極星



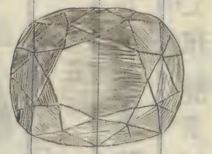
2

デオルロフ

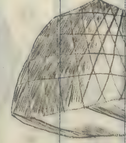


其次ハ「デオルロフ」ナリ此寶石ハ印度ノ佛像ノ眼トナリシヲ佛國ノ大炮兵ノ奪ヒ取ル所ニメ一眼ハ今尚像内ニアリト云其大殆ト鳩卵ニ等シ魯ノ女帝カタリナ第二之ヲ其砲兵ヨリ購ヒ琢磨數回ヲ経テ始テ宝玉トナリ而メ后帝杖ノ鷲下ニ嵌セリ其初磨ノ時日三年ヲ費セリト今其重ハ百九十四カラート七分アリ其形ハ大莫臥児玉ニ同シ魯帝ハ百万牛ノ価格ニテ之ヲ買ヒ「アーデルドムノ貴号ト五万牛ノヤールレンテヲ与ヘタリ

4



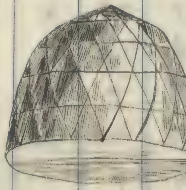
其次ハ天下最大ト称スル大莫臥児ナリ此寶石ノ重量ハ其初メ七百八十七カラート半アリ琢磨ノ為ニ減レテ二百八十カラート」トナル其形

ト大トハ半截ノ鷄卯ニ異ナラ
ス千五百五十年ニ「クールール」

ノ金鑛ヨリ出テ後一二年ニシ
テ「ゴルコンダ」王ノ所有ナリシ
ヲ「メールヨムラフ」人名ナル者掠
奪シテ大莫卧児ノ方ニ遁走セリ其時ハ尚璞玉
ニテ粗糙多斑ノ者ナリシカ大莫卧児ノ攻玉家
「ヘ子チヤ人「ホルテンシオボルジス」ナル者磨シ
テ其頂太高ノ十全ナル「ロース」トナセリ之カ為
ニ斑鈌悉ク去ルト雖特リ其下端ニ一小鈌アル

ト其内面ニ一微翳アルノ外ハ清明無假ノ寶玉
トナレリ然ルニ其主候ハ重量ノ減耗驚歎スヘ
キ程ニ大七百八十七半カラートノ者減シテ二百八十カラートナレハ五百〇七カ
ラトヲ耗セリト半ナルヲ以テ大ニ怒テ其工費ヲ与フル
ヿナクノメ一万ロペイン名貨ノ贖罪金ヲ出サシメ
タリ一万ロヘインハ璞玉ノ代價ナリ千六百六十五年ニハ莫卧
児ノ他ノ寶玉ト共ニ尚「ターヘルニール」ニアリ
千七百九十三年「デルヒ」ノ兵莫卧児ニ侵入ノ時
此宝石モ他ノ寶器ト共ニ「ナヂルザフ」ノ手ニ落
チタリ但シ「バルボツト」氏ノ説ニ拠レハ今ハ波

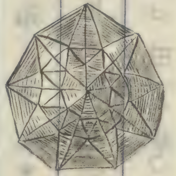
斯国ノ王冠寶トナリテ「デリアイ。ノール」光海ノ義ノ名称アルハ即チ大莫臥児ト同物ナリ

其次ハ「ゴローテ。ペルトフ。ハンロトスカー子」一名「トスカー子。ヂアマント」ナリ其重量ハ百三十九カラート半アリテ橙黄色ナリ



價格ハ一百五十万牛今ハオーステンレーキ國ノ冠寶ナリ「ヨモニン氏云此寶石ハ「カーレル。テン。ストウデ」王カモラト」ヲ討ニ方リテ失ヒシ物ニシテ王ハ其時歎メ云カーレルノ如キ大不幸ノ者ハアラシ此敗軍ト共ニ美玉ヲモ失ヒタリト

其次ハ「コイノール」光山ノ義ナリ是レ英國有名大金剛ニメ天下ニ有名ナル崑吾寶石中ノ古物ナリ



蓋シ傳説ニ據テ考レハ「カルナフ」地ノ「ラヂア」ノ所有ナリシヲ以テ己ニ三千年ヲ出ル物ナリ仮令此説ヲ採ラサルモ本年紀内ニアリテハ「カブール」地ノ候伯ノ所有ニメ「ラボル」地名ノ「ラチア」ナル「リユニエート

シンク㕝ノ手ヨリシテ英人ノ手ニ入レリ英ノ東印度高會ハ古方計筭ニテ大凡三百万牛ニ買得テ而メ后之ヲ又賣リテ英國ノ冠寶トナリタルナリ

上說ニ由テ考フレハ「コイノール」ハ琢磨ノ后モ尚百〇二カラート半ヲ秤クヘシ故ニ其價格ハ概ッ二十九万牛然共其價位ヲ定メテ四千万牛ト云千八百五十一年ニ崙頓ニ於テ博覽會上ノ出品トナレリ

コイノール寶玉ノ琢磨ノ勞費ハ八千ホンドステルリング即チ九万六千牛ナリ玉工ハ和蘭人ニシテ磨スルニ小瀛器ヲ用ヒタリ「キング氏ノ說ニ據レハ「コイノール」ハ印度ニアリテ琢磨セシ時ハ其元形元重百八十六カラートヲ減スルヿハ真ニ些微ナリシヲ以テ全ク一異性ノ寶石ナリトノ史傳ノ價格モ金石屬ニ固有ナル價格モ失セテ今ハ形狀モ良ナラス結晶モ明ナラサル扁平ナル「ブリ、アント」トナリテ其重量モ百零二カラート半ニ減セリ

英國王宮ニハ尚四十五カラートノ崑吾寶石一

アリ之ヲ他寳ニ比較シテ其價位ヲ定ムレハ四万八千六百牛ニ當ル之ヲ「ピゴット」ト名ク然共金剛石書ニハ之ヲ大概十七万八千牛ノ價位トナセリ

其他印度及ヒ諸外国ニ於テ高名ナル金剛石ノ傳説ナカラスト雖略メ論セス

出雲國神門郡鵜峠ノ銅鑛織田完之ヨリ質問ノ答

黄硫鐵鑛（五十三、三分硫黄　四十六、七分鐵）

右ハ硫黄ト鐵ト合シテ成ル所ノ鑛物ニシテ効用極メテ少シ唯是ヨリ硫酸又硫黄ヲ製取スベシ然レ𪜈本邦ノ如ク硫黄ニ富ム國ニテハ其用ヲ成スニ及バズ唯外観ノ美ナルヲ以テ盆玩ニ供スベク又金石學摸範トナスニ足レリ

原来鐵ト硫黄トノ抱合力至テ親シクシテ一度硫黄ト合スルノ鐵ハ最早從前ノ純鐵ト成シ用ユルヿ能ハズ故ニ鑄鉄所等鉄ヲ製錬スルニ當リテ大ニ硫黄

金鑛

伊豆ノ国ニハ往古ノ坑多シ今ハ頽レテ入ルベカラザルモノ十ノ八九ナリ近頃ニ至リ態々堀試ルコトモアリ又堀テ帝ナルモノ多シ故ニ其石ヲ砕キ粉トナシ水ニ淘汰シテ金砂ノ細微ナルヲ得ル或ハ利益アルコトアリ

天城山ノ近辺修善寺ノ辺モ坑穴多シ今茲ニ携ヘ来ル所ノモノハ伊豆ノ稲取ヨリ一里許先濱村ノ板山ヨリ採ル所ニシテ其坑ハ一里許ノ斜ナル所ニアリトテ片山直人氏ヨリ特ニ贈ル試果トナス委細ハ田氏近日面會シテ面語ニ悉サレントイフ

博物局

ヲ忌ム猶醸酒家ノ酸氣ヲ厭フガ如シ是硫黄ヲ含ムノ鉄ハ脆弱ニシテ用ヲナサヾレバナリ

明治十一年二月廿八日　田中芳男記

此品取寄方ヲ依頼スル所　同年五月十六日織田完之ノ目方
壹貫二百六十目有之

明治十四年二月廿三日　田中芳男記

井中ヨリ得シ金銀ノ說

愛智縣下熱田木ノメ町住島本權左衛門ナル者所有ノ井ハ過ル明治九年堀抜ノ井ヲ設クルモノニシテ其深サ二丈一尺水ハ勝テ能ク出嘗テ水色自ラ異ナルヲ見テ金氣ノアランヿヲ思想セシヨリ百方苦慮種々ノ製術ヲ施シ試ムルニ果シテ金氣ノアルヲ知リ終ニ一法ヲ得タリ即チ水面ニ生スル泡ヲ取集メ製衣薬ヲ用井吹分ケルナリ其泡ノ干シタルハ橙色ノ粉ニシテ之ヲ紙ニ寫シタルヲ見ルニ金色判然ナラスト雖モ熟視スレハ微ニ其色アルヲ覺ユ斯ク水面ニ浮ブ泡中ニ混シ出ルハ必ス其質ノ多ク含有セルモノナルベシト其浮ベル泡ノ干シタルニ製出セシ金及ヒ銀ノ細片ヲ副同縣下名古屋第一區會所戸長加藤善富ヨリ織田完之ヘ向ケ參考ノ

為メ見本トシテノ贈ラレタリ同氏之ヲ博物館ニ寄セテ鑑定ヲ乞フ
因テ検スルニ其詳ナルハ小量ナルヲ以テ充分ノ試験ヲ得スト雖モ
銀ノ含メルハ確徴アリ今少シク其量ノ多クヲ以テ試験セハ必
ス金ヲモ分離シ得ベシ惟フニ尚井底ヲ吟味スルヲ待テ其詳
說ヲ得ベシ

明治十一年六月六日　武藤壽記

愛知縣下名古屋第一區戸長加藤善富ヨリ織田完之ヘ
来翰中抜萃

熱田地ハ往古ヨリ掘抜井ハ工事至難ニテ施行無之候処昨年
ニケ所工事成リ初メテ水ヲ得タリ其内木ノ免町島本権左衛
門ナル井ハ深サ貳丈壱尺水ハ勝テ能ク出然ルニ青キ色アリ
テ金ノ氣アリ段々タメシタルニ彌金ノ氣アリ既ニ試タル吹
分ケノ金板銀板ヲ見タリ其取様ハ水面ニ生シタル泡ヲ取集
製薬ヲ以テ吹分ケシ由其泡ノ干タルハ橙色ノ粉ナリ又其泡ヲ
紙ニ寫シタルヲ見ルニ金色判然ナラサレ𪜈熟覧スレバ紛フ方ナ
キ金色ナリ産ブニシテ斯金色ヲ顕スハ其氣ノ充満シタル故カ

當時ニテハ不及聞説ナレバ聊カ御参考ニ供スト云々

本行ノ品ヲ望テ吹ク得相捧候紙ニ寫シタルヲ得ズ

アリノ包紙ノ端ニ寫シタルヲ御熟覧ヲ乞フ

先日入湯随ニ尾張熱田之井水ニ而発見ニ絵合之丈

量ヲ十分ヲ識ヘヲ申上事ヲ於其緒地総て書ヲ識し如く金

く金銀之合ノ上ハ純金銀とあきつきハ當然予ノ然ルニ其

多少其入書ヲも御座ヲ候付学ヲ絵合之絶え御用ひは

ゞ却て便益ヲ可申や尾張ハ陶器之名産ゆ右絵を

合絵ヲ御用ひれて如何候哉と申し銀を合ヲ付不十分ヲ存候ハ

で銀を去るの法ニ熟練之共絵を含む水ヲ含塩を和し銀

を沈澱ニ分解せしめ然るゆ不用ヲ無之様の法を施

すべし用方ハ必ず陶工をして研修せしむる方可然と

博物局

右ノ試験ハ本邦ノ實ニ如何ナル人心術ヲ便ナラシム也

十年六月七日

博物局

田中芳男

愛知縣

勧業課御中

吹原正六名

青銅(カラカネ)

教育雑誌ヘ出ス

銅鉛ノ人身ニ害アルノ略説

金属ノ内人身ニ益アルモノハ唯鉄ノミ其他ハ悉ク人ニ害アルモノトス其中最猛烈ナル水銀ノ如キアレドモ今茲ニ平日需用スル金属ニシテ最有害ナルハ銅鉛ヲ以テ最モ甚シトス銅緑(ロクシャウ)ノ毒タルヤ稍之ヲ知ル者アリト雖モ銅ヲ以テ製スル者及ヒ真鍮唐金ニ至リテハ銅ト同物ナルヲ知ラザル者多キヲ以テ注意スルヿ少シ然ルニ世人鉄気ヲ畏レテ之ヲ防禦スル方法ニ注意スルヿ多シト雖モ銅ハ却テ畏レズ故ニ銅製諸器ヲ食物料理ノ器鍋ニ慣用シ又白鑞(シロメ)ノ剥離セル青銅ノ鍋ヲ用ヒテ更ニ畏ルヽコトナク銅緑ヲ以テ染ムル所ノ青昆布ヲ食シテ毫モ意トセザルハ思ハザルノ甚シキト云ベシ又鉛毒ノヿヲ挙レバ我邦従来ノ習慣ニテ酸化鉛ヲ

（活字ヲ植ル職人ハ鉛毒ナ受ル者ニ病ヲ発スト云フ

是ハ新聞紙ニサシ括書ニカト存シ候ニ加ヘズ

白粉ニ用ヒ無慮ノ人身ニ塗抹シ毒分ヲ血液中ニ吸収セシムルハ虚飾ノ為ニ天賜ノ性命ヲ損害ス実ニ蒙昧無智ノ所為トセンカ此他鉛製品ヲ使用スルノ人ハ各注意セザレバ早晩其害ニ罹ルヤ必セリ

銅毒ノ食物ニ浸入スルヲ防ガント欲セバ成タケ鉄ナ以テ之ニ代ユベシ又白鑞ヲ鍋中ニ塗リ銅気ノ出ルヲ防ガバ其毒ヲ食物ニ施スノ患ヲ避クベシ

昆布ノ如キハ緑色ヲ要セズ又白粉ハ酸化鉛ヲ用ヒズシテ米製其他天衣粉ノ如キ上等ノ澱粉ヲ以テ其用ヲナサシムベシ（西洋ノ白粉ハ澱粉ニ無量ノ酸化金属即チ亜鉛華等ノ如キヲ十分ノ一許加ヘ之ニ芳香料ヲ以テ香気ヲ与フルモノナリ）其他鉛ヲ要用スルノ工業モ尚一層ノ注意シテ其毒ニ侵サレザル様ニスベシ銅鉛等ノ性質毒害等ヲ知ラント欲セバ近日博物局刊行ノ金石学ニ就テ見ルベシ

明治十年三月九日

田中芳男記

東京大学総合図書館

赤間町ノ近邊ヨリハ百姓家残リナク朝夕ノ薪ニ石膽ヲ用ユ石膽多ク出ル所ナリ此地ヨリ出ルハ黒クシテ往来筋ハ年々落チ穀リ石膽ニテ道筋黒クシテ雨中抔ハ往来ノ人手足黒ク染付ヿナリ此地ヨリ三里南遠賀郡ノ内香川村ト云フ所ヨリ出ル石膽ハ摺墨ニ用ヒテ下直ナル墨ヨリハ一段ヨシ佛家ノ経文ヲ書寫スルニハ膠ノ入ラス清浄ノ墨ナリトテ他國ヨリ求ル事ナリ此外ニモ大平墨ヲモツテ板壁ナドヲ塗ル所ハ此石膽ヲトキテスルニ太平墨ヨリ勝レテヨ

シト土人ノ物語リシナリ

石炭分析之表

ギラルジン著書ヨリ出　宇都宮氏抄譯

肥石炭ノ部

産出ノ地	千分中所含之量 揮発分	炭分	灰分
アンシン（蘭）	二五〇	七一五	三五
クレオント（佛）	三一二	六五四	三四
デーレセ（同）	三〇〇	六一一	八九
ライブデギール（同）	三一五	六六五	二〇
ボウグラスチック（同）	一七一	七七一	五八
子ウカストル（英）	一八六	七六〇	五四

産出ノ地	千分中所含之量 揮発分	炭分	灰分
ベルゲン（獨） ドールノ石炭鑛	二三三	七一五	五二
ベルゲン（同） ガーデノ石炭鑛	四四〇	五一〇	五〇
ワイゲン（英） 洪地ヨリ産スル者ハ第一番ノ焔ヲ以テ燃ユ故ニ「アンドルコール」ト云	四四〇	五二六	三四

痩石炭ノ部

産出ノ地	千分中所含之量 揮発分	炭分	灰分
ボウクラスチック（佛）	七八〇	一六五	五五
フレスチス（同）	八九三	九四	四三
ラルザン（同）	六〇八	三三〇	六二
ブランシー（同）	五四三	三九六	六一
サランス（同）	五〇〇	三七〇	一三〇
テユルハム（英）	八二〇	一三三	五〇
ベルゲン（ヘスゴウヱン） 洪地ヨリ産スル者ハ黒性ニシテ「アンタラーシート」ト云フ	八五〇	一二七	二三
オビード（スパニー）	五〇三	四一七	八〇
オムブロワ（プロシヤ）	五一〇	四五〇	四〇

東京大学総合図書館

泥炭説

飯島半十郎草

泥炭和名スクモ下総ノ方言ニケド又ケトウト云ヒ伊賀ノ方言ニウニト云フ洋名タルフ一種ノ燃材ニシテ其質脆ク色褐色或ハ云フ植物ノ化セシ所ナリトコレヲ燃ヤスニ火力石炭ニ及ハスト雖木炭ニ比スレハ殆ニ倍ノ力アリ我カ邦従来泥炭タメシ天智天皇七年ニ越後ヨリ燃土及燃水ヲ献ルト云ヘル燃土即是ナリ後コレヲ用ヰルノ地ヲ聞カス唯近江國栗太郡及伊賀國安拝郡又越後國岩船郡ノミニテコレヲ燃ヤシ以テ薪ニ代フ其ノ他ハ何ノ用タルコトヲ知ラサル所多シ欧洲ニテハ佛ノ必加爾英ノ蘇格蘭及和蘭亜諾威爾維士徳奈里亜等皆コレヲ用ヰテ佛ノ如キハ其ノ利毎年三百萬フランクニ下ラスト云

ヘリ余頃日日暮里村ノ邊ニ遊ビ泥炭一塊ヲ得タリ因リテ其ノ傍ヲ
捜索スルニ地中層々泥炭ナラザル所ナシ其用法ヲ土人ニ問フニ土人
コレヲ知レル者ナシ余乃懐ニシ帰リ其ノ火力ヲ試驗セシニ八五匁ノ
泥炭ヲ以テ一斗ノ水ヲ煎沸騰点ニ至リ火力益熾ナリ
後木炭五百匁ヲ以テ同量ノ水ヲ煎ルニ未沸騰ニ至ラスシテ熄ム
其ノ火力ノ木炭ニ勝ルコト以テ知ルベキナリ但其ノ氣少シク臭キヲ
憂フルノミ後コレヲ人ニ聞ク歐洲諸國ニテハ竈ニ入レテコレヲ燃キ
一種ノ格亜屈（コアク）木炭ノ類トナシ臭氣ヲ去リテコレヲ燃ヤシ又コレヲ掘リ
出タスニハ大抵春夏ノ交斷取スルニ鋤ヲ以テシ恰煉化石ノ形ノ如ク
シテ秋冬ノ間ニ至レバコレヲ日光ニ曬シ然ル後ニ其ノ用ニ供スト云フ

我カ邦遺利ノ多キコト此ノ如クニシテ有力者未（未）コレヲ興スノ道
ヲ講セス徒ニ視テ土泥トス誠（誠）ニ慨嘆スベキナリ

筑摩縣管下信濃國筑摩郡伊深村農黒岩利恭外
二名ヨリ石綿布製造ノ儀願出候間致推問候處
同縣下ハ勿論其他所々ニ石綿有之候間同志ノ
者申合會社設立布并紙共製造ノ儀盛大ニ營業
致シ度趣申出候然ル處石綿布并紙共何等ノ所
用ニテ効用ハ如何有之哉外國ニテモ稀少ノ物
品ニテ格別珎重可致哉價ハ何程位ニ候哉右廉
々願入口述ノ次第モ有之候得共明確ニモ無之
ニ付及御問合候條乍御手數其筋ニテ御取調詳
細御回答有之度候尤製造ノ石綿布為見本差出

有之候間試驗等ノ為御入用ニモ候ハヽ御回可
申候得共先以此段御依頼旁及御掛合候也

明治六年十一月廿五日

大藏大少丞

文部大少丞

御中

石綿ノ儀ハ火浣布火浣紙其外紐又ハ袋抔ニ製
造ノ法洋書中ニ粗記載有之我邦ニ於テモ先年
火浣布織試候者モ有之由候得共何分石綿モ多
分ニモ採索シ難ク製作モ便宜ヲ得スト相見エ
其業中途廃止ノ事ニ相聞エ申候尤右以前平賀
源内大槻玄澤等火浣布ノ説相論シ候事モ有之
候従来石綿産地ノ義ハ外國ニテハ支那陀入多
地中海ノ東部又希臘翁加利其他俄英獨蘭等諸
國ニ有之候得共石綿ノ全體ノミニテ産出ノ品
ハ無之唯他ノ石間ニ含畜シ多分ハ出不申事ト

相見エ申候我邦ニテモ越後信濃其外西國等諸國産地有之候得共是迄多分産出ノ地モ相聞エ不申候然處今般多分ノ産地ヲ撿出シ製造熟練シ布紙紐等ノ諸品出来候ハヽ追々有益ノ新考モ可有之假令ハ「グルーンランド」ニ於テハ石綿ヲ以テ「ランプ」ノ心ニ相用ヒ綿ヨリハ久ク相保チ申候抔ノ如キ工夫モ可有之候勿論何程ノ益何程ノ價ト預メ確定スベキニ非スト雖モ其製出ノ諸品火ニ投シテ焼却セズ内外國民珍賞ノ奇品ニモ相成候ハヽ其産地ニ於テモ無益ノ業トモ難申殊ニ申立ノ通孫會社設立盛大確実ノ目的モ有之候ハヽ先営業為致御試相成候テモ可然奉存候也

明治六年十一月廿日

石綿ニテ製シ火浣布火浣紙麻
組ミ袋ノ類ノ製造ノ法洋書中
ニ記載有之処我邦ニ於テモ
先年火浣布織試候者有之由
然ル処何分石綿モ多分ニモ探索シ
難ク製作モ便宜ヲ得ズト相見ヘ

且業中途廢止之事ハ未聞申候
元右之外平絹縮緬内太織之類
等ハ流布之説ニ拠テ論レバ品モ有之候
従来右縮緬之産地之義ハ外國ニテハ
支那ハ沿海多ク地中海之東部 又
ギリシヤ、オンガリヤ、其他佛、英、獨、
蘭等諸國之内ニ而皆右縮緬ノ全

全體ノ多クニ而ハ産出之品ハ無之只
他ノ右間ニ合畜ニ而多分ハ出来不申
夫ヨリ未見申候我邦ニテモ越後信濃
其外西國ニ而諸國之産地其品是
是近多分産出之地モ未聞不申候
然ルニ最多分之産地ヨリ輸出シ
製造熟練之布、紙、紐ニ至マテ其品

出来シ以テ追々看客ニ就キ候事ニ候
価ニ至テハグバーンランドニ於テハ石綿
ヲ以テランプノ心ニ用ヒ綿ヨリハ
久シク相保チ候由ニ承リ如キ工夫モ有之候
如斯何程ニテモ何程ノ便利ヲ得ル
確定スヘキニ非スト雖モ且ツ創業ノ
諸品火ニ投シテ焼却セス内外

国民殊ニ賞スヘキ一品ニモ有之候以テ
其ノ産地ニ於テモ甚タ盛ニ業ヲ起シ候樣
殊ニ中ニモ通シ殊ニ会社ヲ設ケ盛大
確定スヘキ目的モ有之候以テ先ツ営業
為致候試ニ製造成ニ相成候事ニ御座候也

明治六年十二月廿日

伊藤圭介

保弘道君
此職襲天保年中
三豊由緒並
隆徳子由を
改号し大日本公布
候々織之碁
上て書刑行
のおかし

十二月丁子

東京大学総合図書館

工業新報第拾六号抜萃

石綿の功用

石綿ハ白色にして綿糸を並べたる如き礦物なり而して「シリカ」石英「マグ子シヤ」等の者より成る漢土に所謂火浣布ハ蓋し之を以て製したる者なり 本邦にハ陸奥北海道其他にも産す何れも其量少し之を燈火の心に用ふれハ少しも減することなし又化学家猛烈なる酸類を濾すに用ひて腐蝕の憂なし然れ共其外の功用少きを以て従来世に大功用なき者とせしが近頃米国紐育に於て

シ雑ノ紡キ得ベキニ非ザレハ石綿ヲ油ニテ潤シ亜麻綿ヲ加ヘ紡ギ或ハ鹿紙ニ和シ之ヲ製スル法昔時ハ秘法ナリトシ

「ジョンス」氏なる者一種の薬を発明し此石綿に混和し之を木綿或ハ皮類に塗り舗物を製し或ハ之を屋背に張りて火災の憂を防ぎ又之を蒸氣罐の外面に張り温度を散せしめさるのみならす決して火を傳ふる患なからしむる等に用ひたり是より米国に於て石綿の製作頗る盛大となりしとなり宇宙間萬物一として無用の者なし能く熟慮深考用ふるときハ其有用となす豈特り石綿のみならんや

燧石

一 海岸ノ絶壁云々　五貫目　三塊

破砕セル面ヲ見ルニ質緻密ニシテ白色ナリ燧石ニハ非ス白瑪瑙ナルベシ発火器ニハ上等ナリ或ハ其美麗ナル部分ハ磨シテ飾具ニ供スルニ足レリ

一 幽谷中ニ轉ヒタル云々　七貫目　貳塊

無色半透明前質ト同シ両面ニ水晶ヲ附着ス

一 岩石ノ間ノ脈筋云々　茶色ナル者　五貫目　貳塊

前質ニ同シト雖モ性質稍劣レリ故ニ燧石ノ用ニ可ナリ

島根縣ヨリ雲母鉄鑛性質問合ノ答

酸化鐵鑛ノ一ニシテ則チ赤鐵鑛ノ類屬ナリ(無名異、代赭石)等之亦同質ナリ皆ナ第二酸化鉄トス尋常赭褐色或ハ赤色或ハ鋼色等ヲ顕ハスモノナリ

此種屬中堅軟ノ度一ナラス外貌モ亦随テ諸様アリテ名稱ヲ區別スト雖モ其質ハ第二酸化鉄ノ或ハ粘土ヲ混シ鮮美ノ赤色ヲ呈シ(代赭石)又硅石等ヲ混有シテ堅硬且暗赭色ナリ(無名異)又微塵ノ雲母状ニシテ赤色褐色暗鋼色ナリ御地産ノモノ則是ナリ

名稱

雲母鐵鑛又鱗状赤鐵鑛ト訳ス

英名 Micaceous iron ore 独乙名 Eisenglimmer.

局用 内務省

成分

此種属ノ鉄鉱最良ノモノハ七十分ノ鉄三十分ノ酸素ナレ𪜈美ナラサルモノハ他ノ雑質ヲ混有シテ其成分一定セズ

使用ノ有無及ヒ需用ノ多寡

赤鉄鉱ノ質緻密ニシテ赤色鮮美ノモノハ[illegible]彩色料ヲ製シ或ハ金属ヲ磨琢スル等各種ノ用アリト雖𪜈雲母鉄鉱ノ如キハ其用ニ供シ難シ但此鉱ハ硫黄ヲ含マサルヲ以テ純鉄ヲ製スルニハ良鉱ナレ𪜈内地産其ノ甚タ多カラサレハ製鉄ノ需ニ足ラス

価格

別條ナキヲ以テ豫定シ難シ

武藤 書記

浮石

鳴門氏曰薩广市来辺又大隅カジキ奥等ハ地面ノ植物土ノ下第二層目ハ火山灰アリ是ハ堀テ肥料トスレ𪜈其内ニ浮石ノ大ナル多クシテ用ヲナサズ此石ハ常ニ山崩レ雨降等ノ為メ川ニ流レ下リ磨セラレ夫ヨリ海濱ニテ磨セラレ円クナリ打揚ラル、ユヘ俗ニ海ノ泡ノ化スル所ト称スルナリ

明治十三年十二月十九日

田中芳男記

一 石灰

青梅驛ニ至レハ生山石灰賣ル者ノ脚夫ヲ見ル西ア此驛邊ニ
石灰焼製スル者夥シ
青梅驛ノ先キ万年橋邊ニハ石灰礦ノ露出ヲ見ル此邊ヨリ下ニハ
玉川ノ河岸合リ石灰礦ナル処アリ砕キ焼キ筏ニテ
下ストイフ 又此邊ヨリモ焼製セリ
柚木村御岳村邊ヨリハ更ニ良ナリ
此石礦ハ灰白ニ蒼斑アリテ其質ニ能ク佳良ナリ熱ニ此
地ニテ焼ク所ノ漆灰ハ格別上等ナラザルカ往々冬月凍沍ノ
徴ヲ見ル又擣テ数日ヲ經ザレハ水ヲ満タシ后是ハ恐クハ製造

者ノ上等ナラサルニ因テ記ス

明治十一年八月十四日

田中芳男 記

透明衡灰石

大分縣下豊後國大野郡尾平鑛山ヨリ産出スル 其上等結晶ニテ稍黄色ヲナス者 昨明治十年内國勧業博覧會ヘ出品セリ 其結晶透明ニテ美ナルヲ以テ 黄色水晶（紅）ト名ケ出セリ

右品ヲ検スルニ 全ク衡灰石ニシテ 五色石英及雲石ト同質ナルヲ以テ 化学試験用（玻璃製造ノ鎔媒）及ヒ玻璃ヲ彫鏤スル用ニ適セリ

明治十一年五月一日 博物局ヘ取寄スル所ノ品ヲ検スルニ 結晶ノ形大小アレド 等軸八面形ニシテ稍黒ヲナセリ。

上等ナルハ透明氷ノ如シ或ハ酸化鉄ヲ挿ミテ黄色ノ看ヲナス者アリ

之ヲ採取スルノ費及ヒ運送費ヲ除キ一斤ノ價ハ金拾五錢ニ當レリ

明治十一年五月一日記

螢石 和名 衡灰石 英 即チ衡酸石灰 Fluorite. 金石學二百五十七丁ニ出ツ

大分縣豊後國大野郡木浦鑛山産原稱紅色ノ水晶ト名クルモノハ全ク螢石ニシテ從来支那ヨリ舶セシ五色石英ト同質ナリ成分ハ二十七分ノ衡酸ト七十二分ノ石灰ナリ現今日本ニ於テ発見スル所ノ産ハ皆晶形分明ナラザル多シ該縣ノ産モ亦分明ナラザレモ凡二貫目ノ内ヨリ撰出シテ漸ク一塊ノ等軸八面少シク歪形ヲナスモノヲ得タリ此他稀ニ同晶形アルハ能登國鳳至郡宝達山ノ産ナリ此両種ヲ比較スルニ大分縣産ヲ遥ニ良品トスベシ外國ニ於

テ其結晶頗ル大ナルハ殆ンド径リ尺餘ニ及フモノアリトス其色緑、紫、藍、紅、黄ノ各種アリ時トシテ外貌石英ニ似タルモアリト虽モ火中ニ投スレハ燐ノ如キ光ヲ發シ砕末シテ強キ硫酸ニ投ズレハ衡酸気ヲ発揚ス故ニ識別スルコ甚タ易シ吹管ニテ熱スレバ爆裂飛散シテ声アリ小片ハ熔解ス

用法ハ此礦石ハ他ノ鑛ヲ鎔解スル媒ニ用ヒ又衡酸ヲ製シテ各種ノ所用アリ即チ硅酸抱合物ヲ分解スルヲ以テ金属ヲ分錬スルノ要品トス凡石質中硅酸ヲ含ムモノハ衡酸ヲ以テ蝕スベシ就中玻璃ニ書画シ或ハ彫刻スルニハ先ヅ之ニ蠟ヲ塗抹シ刻スベキ部分ニハ塗ラズシテ衡酸ニ觸レシムレバ容易リ痕跡ヲ生ジテ彫刻ヲナス又其質美麗ナルハ磨シテ器具ニ製ス方今日本ニ於テ専ラ便用セル陶器ニ用ヰル尋常白色釉薬ハ硅土ヨリ製セリ然ルニ此螢石ヲ以テ代用セバ更ニ層色澤アル釉薬トナリ殊ニ可ナルモノトス故ニ今硅土製釉薬ヨリ下廉ニシテ多ク産出スルニ至レバ陶工ハ必ズ之ヲ需用シ自今外来ヲ不仰ニ至ルベシ現ニ東京ノ薬舗ニ鬻ク支那産ノモノハ概子

一个ノ價三十錢位ナリ而シテ陶工ノ多ク買入ル、
所ト雖モ粗品ハ二十錢ヨリ良品ハ二十五錢ニ至ル
之ヲ亜砒酸ニテ融解シ陶器ノ粉色料ニ配シ他ノ色
質ヲ変換セシムルノ効アリ

明治十一年五月二十二日　武藤壽記

本書ハ大分縣ヘ差ス控ナリ

黄葉詩巻附録下ヨリ抜萃

石乳

壬子之夏自作州帰取路備中井殿嶺入鍾乳穴穴
入携東篠長竿及燧而先導下嶺得壑洞門在南壁
廣僅容人始投奇寒氷肌稍入左折深黒如漆穴入
乃敲燧東火目境頓豁渺然如入別世界審視之有
物参差而出不知其幾千萬立者臥者圓者方者楕
者修者或人或鬼或鳥或獣怒若者驚若者如雙虎
相噬者如両牛相角者如百蛇相交纒者如悍夫張拳
相殴者皆乳也時聞錚然有響乳之滴也其餘大竈

一小竈一釜二笠二飾顆二组一飾碇二鐘一浮圖
數十幡數十柱數十肝數十形皆逼真実天下之奇
観也穴人曰公等欲見天堂乎乃着火竿頭稍々乎
擎之擎至空際彷彿見如諸佛菩薩駕紫雲降者怪
亦甚只恨火力短目不了々而已穴人又曰欲見魚
棚乎子重氣餒瑟縮曰日暮途遠請割愛出余靳之
曰子醫人而畏乳其将何顔見神農氏地下也強拉
到棚益乳之落在石上者猶魚所列魚棚上状故名
也奇盡而出還穴人家穴人進酒臭苦如茶喫一梡
辞去 子重同遊醫者

伊勢産水石

木葉石トシテ御國ノ礦物ハ金石学ニ載スル所ノ石灰華ト同質ナリ
此成立ハ炭酸石灰分ノ水中ニ溶化沈積シテ成ル者ナリ故ニ之ト接スル木葉
又ハ魚骨等アルハ密着シテ其形跡ヲ存ス成分ハ炭酸石灰中粘土分ヲ
混淆ス若シ此礦巨額ノ産量アルハ焼キテ石灰トナスヘシ又一方ニ水晶
様ノ晶物アルハ炭酸石灰ノ晶質ニシテ英名Calcite是ナリ

石灰石石含利塩ノ二物各凝水石ノ名アル解

古来和漢トモ凝水石ハ寒水石ノ一名トシ又含利塩ノ一名トセリ寒水石ハ
石灰石、大理石、石灰華等ノ総テ炭酸石灰質ノ石名ニ用ヰタリ常陸
産大理石ヲ以テ寒水石トスルカ如キ是ナリ古書中寒水石ノ名ヲ含利塩ノ

本名ニ用サスルハ異物同名ニシテ近世不通蓋シ是等ノ錯雑セル名アルハ當時
金石學ノ精密ナラサルヨリ起ル所ニシテ別ニ怪ムニ足ラス古書ニ因ルハ往々
他ノ石名ト無テ此類甚タ少カラス
近來漸ク金石學ノ精密ナルニ至テハ支那ニテモ凝水石ハ専ラ石灰属ヲ指
シタル者多シ（但シ本草綱目啓蒙ニハ凝水石ハ含利塩ニ充テタリ）既ニ漢訳
地理全誌中地質論ノ部ニ寒水石一名凝水石ト記スルハ決テ含利塩ヲ云フニア
ラス蓋シ石灰石ノ總稱ニ充ルノ明カナリ故ニ石灰華ヲ凝水石ト云フモ可ナ
ルベシ
今此ニ含利塩ト石灰属ノ區別ヲ明カニセシニハ含利塩ハ塩類ナルヲ以テ之ヲ凝水塩
ト云ヒ石灰石及ビ石灰華ハ石属ナルヲ以テ之ヲ凝水石ト云ヘハ甚タ混淆セズシテ
可ナルベシ
前説ヲ概シテ云ヘハ含利塩モ凝水石ト云ヒ石灰石ヲモ凝水石ト云ヒシハ同名
異物ニシテ解シ難シト無テ是レ古来混稱スル所ニシテ肯テ咎ムルニ足ラス
十年内國勧業博覧会地理局出品ニ凝水石トアリシハ即チ水石ニシテ其質ハ石
灰華 Calc Tufa 又 Calc sinter ナリ

明治十三年十一月

白野七兄郎 記

此ノ木葉石ハ市言水石ト称スル[illegible]
モノニ葉紋附着致シ候モノニ御[illegible]
坐候此ノ水石ナルモノハ金石学[illegible]
ニ石灰華ト有之候モノニ御[illegible]
候哉曾テノ内國勧業博覧会[illegible]
ノ節地理局ヨリ此ノ水石ト同[illegible]
ナル出品アリ其レニ凝水石ト[illegible]
礦石名記載有之候ト相覚ヘ[illegible]
候凝水石ハ須利塩ノ一ト被[illegible]
候得共水石ニモ凝水石ノ漢[illegible]
御坐候や奉伺候御序ノ節
御示教奉願候

[illegible]一郎

田中先生

石膏ノ効用

明治十一年一月
竹本要齋ヨリ借寫ス

石膏ハ硫酸石灰ニシテ水ヲ結ヒ固形物トナリ石体ヲナシ透明玲瓏水晶ヲ欺クナリ此ノ結晶水ヲ文火ニ煅テ蒸發ナサシメ而テ真ノ硫酸石灰ニ到ル之レ則チ義布斯ナリ此義布斯ヲ以テ磁器製造ノ模型トナス其法實ニ歐羅巴ニ創レリ凡ソ義布斯ヲ煅ニトト欲スル者ハ石膏ヲ細末ニシ淺瓯ニ盛リ火炉ニ上セ抃拌シツヽ炒リ水分ヲ蒸發ナサシメ最初ハ抃拌シ難ケレモ結晶水分去ルニ随ヒ漸々抃拌シ易ク遂ニ水氣全ク去テ乾砂ノ如クナル是レ義布斯トナルノ

徴候ナリ若シ武火ニ煅キ過キタルハ硫酸ヲ併セテ飛昇シ去リ純然タル石灰トナリ凝結ノ効力ヲ失却ス義布斯トナリタル適宜ノ徴ヲ見ント欲スルハ透明質ヲ全ク失ヒタルヲ適度トス又壹法ニ石膏原塊ノ侭煅テ結晶水ヲ去ルアリ先ツ火炉ノ如キ一ノ瓦爐ヲ作リ火袋ノ懐ヲ廣クシ尋常ノ如ク底網ヲ設ケ上ニ炭火ヲ熾ニシ湯鑵ナリ茶鐺ナリ水ヲ煎テ沸カシメ其瓦炉熱シ手ノ觸ル可カラサルニ到リ炭火ヲ全ク移シ去テ熱ノ去ラサル中ニ預シメ適宜ノ小塊ニシタル石膏ヲ炭火ト取換ヘテ満タシメ上ニ平瓦等ヲ以テ蓋トシ容閉ナサシメ火炉ノ下ナル風口モ同ク容閉ナサシメ温氣ノ全ク散スルヲ待テ石膏ヲ取出シ其中心マテ透明質ヲ失ヒタルヲ度トシ之ヲ細末トシテ用ユルナリ又壹法ハ余カ陶器所ニ就テ煅クノ便法ヲ發明シタリ此法甚簡ニシテ妙ナレハ徒ニ人ニ傳ルヲ惜ム然レ氏苟モ國益ヲ計ル人ヲ得テ之ニ傳フルハ何ソ惜ムノ理アラン依テ此ニ述フ抑此簡妙ノ法タルヤ陶器ノ素焼ヲナシタル後火ヲ去温氣ノ充満シタル中窯内器物ノ上ヘ石膏小塊ノ侭投下シテ結晶水分ヲ去ル煅キ易クシテ且炭薪ノ費

ナシ常ニ徒ラニ消散セシムル無用ノ熱氣ヲ借リテ
我カ有用ノ義布斯ヲ煆クノ故ナリ其窰普通ノ素焼
窯ニテハ用ヲ為スヿヲ得ス一種余カ工夫ノ素焼ニ
シテ始メテ煆クヲ得可シ其窯製圓ナルモ方ナルモ
問ハス屋ヲ其上ニ架シ煙筒ヲ屋背ニ突出シテ穹ニ
接スルガ如クスル是ナリ扨此窯中既ニ石膏ヲ投下
シタル後ニ窯口ヲ能ク密閉シ薪ノ焚キ口モ亦同ク
密閉ス煙筒ノ口ハ半ヲ閉テ聊ツヽ温氣ヲ去ラシメ
ルナリ義布斯ヲ製スルノ法前諸件ニ就テ之ヲ求ム
レハ先ツ旦ルト云ベシ都テ結晶水ヲ去ル適宜ノ熱

度ヲ云ヘハ百三十度以上百八十度ニ止ル然レ𪜈緩
急ニ依リ差ヲ生シ熱度ノ必ヲ豫定シ難シ又僅カ五
十度ノ温氣ヲ以テ結晶水ヲ去ルノ法アリト傳聞シ
タレ𪜈未タ探知スルヲ得ス義布斯ヲ摸型ニ作ラン
ト欲スル者ハ細末ニシタル義布斯ヲ水ニ溶解シ恰
モ銕ヲ溶シテ湯トナシ物ヲ鑄テ形ヲ製スルカ如ク
ス譬ヘハ斯ニ一器アリ其之ヲ摸寫セント欲スルニ
方リ先石鹼（十分）ポッタース（三分）水油（五分）純水（適宜）（此量薬品
ノ精粗ニ依テ差異ヲ生ス斟酌シテ製スベシ）右三品
ヲ以テ煎タル一種ノ粘水油ヲ其器ニ塗抹シ遍満濡

潷セシメテ木盤上ニ安置シ外ニ銕葉或ハ木片ヲ以テ囲ヲ為シ周匝ナラシム其銕葉或ハ木片ノ外圍ト器ト中間ノ遊隙ハ則チ模型ノ成ル所ノ地ナレハ此遊隙地ヘ義布斯ト純水ト等分ニ溶解シ葛湯ノ濃キ程ノ白汁トシタルヲ扮拌シナカラ手早ク注キ入ルヽナリ（外囲ハ鉛葉ヲ用ユル滑脱ニシテ尤便ナリ）此義布斯ト水トハ定量無シ實驗シテ自得スヘシ如何トナレハ器物ノ大小精粗各種ニ依テ義布斯汁ノ濃稀ヲ斟酌セサル可カラサレハナリ扨此汁ヲ注キ入タル後十五分時間モ置外囲ヲ取放チ凝結ノ硬軟ヲ

驗テ器ヲ取出ス可シ其型ヲ得ルナリ前ニ云凝結スルノ理ハ硫酸ト石灰トノ親和力ニ依リ水ヲ結ヒ凝固体トナル此理ヲ能ク辨明シテ施サヽレハ就成セス凝固体トナリタル上ハ忽チ鏘然トシテ叩ケハ響ヲ發スルコト疑ヒヲ容レス模型既ニ成テ後連日乾燥ナサシメ些ノ湿潤ヲ留メサルニ至リ陶土ヲ水ニ渾和シ葛湯程ノ泥汁ト為シテ型ヘ溢ルヽマテ注キ込ミ少時間ヲ隔テ型ヲ傾ケ泥汁ヲ瀉出スル時ハ模型ノ周邊ヘ泥土粘着シテ留ル盃碗碟皿各其型ニ随フ其侭再ヒ扨盤上ニ安置シ以テ其乾ヲ待ツノミ既ニ

東京大学総合図書館

乾テ型ト離レ隙ヲ生シタルヲ見テ始テ作ル所ノ器ヲ出ス此器ハ厚ト薄トハ始メ泥汁ヲ注キ満テ安置セル時間ノ緩急遅速ニ随ヒ自在ニ我カ心ノ侭ニ製シ得ヘシ若シ其製造ノ手段ヲ細書スルニ到テハ遂ニ小冊子ヲ成スニ至ル依テ此ニ筆ヲ閣ク也
因ニ云石膏ハ漢科医傷寒患者薬用シテ効アリ義布斯トシ西洋医外科接骨治療ノ必用物ナリ又獣皮ノ阿膠質ヲ去ルニ用ヒ甚ダ絶妙ノ効アリト云フナリ又「マルブル」石ヲ摸偽スルノ法アリトホタ實験ヲ遂ズ経験シテ細記スベシ

明治九年仲秋

竹本隼太誌

石膏粉製造并功用説

石膏(Gypsum)ハ有水硫酸石灰ニシテ結晶即尋常石膏及ヒ無晶即雪花石膏トノ二種アリ皆以テ石膏粉(Plaster of Paris)ニ製シ摸形ノ用ニ充ツベシ之ヲ製スルニハ塊ノ儘焼テ後粉末ニスルモ又粉末トシテ後焼クモ妨ナシ但シ煆焼ニ過ルトキハ硫酸ヲ消失スルノ虞アリ能々注意スベシ今粉末シテ後ニ焼クノ法ヲ次ニ示サン
粉末ハ成タケ極末トナスヲ良トス之ヲ焼クニハ鍋ニ入レ火ニ上スベシ然ルトキハブツ／＼ト

煮立ツコト恰モ糊ヲ煮ルガ如シ此時相應ニ攪セテ不同ナカラシムレバ水氣次第ニ蒸発シ去テ全ク盡ルニ至ル其水分ヲ去シヤ否ヲ撿スルニハ厚キ硝子片又ハ滑面堅密ノ石或ハ厚キ陶片等ノ如キ冷ナル物ヲ以テ粉ノ上ニ挺出スベシ若シ水氣アレバ其水分右ノ表面ニ凝固スルナリ因テ全ク曇ラザルニ至ルヲ度トス焼終テ后壺又ハ壜中ニ容封シ貯フ

右ノ粉末ヲ煉リテ摸型ヲ作ルハ其物品ニ因テ同ジカラズト雖モ今魚類ヲ以テ製スルノ方法ヲ解カン

粘土(ネバツチ)ヲ煉リテ摸型ヲ作ラント欲スル魚ノ半身ヲ埋メ諸鰭ヲ延バシ平カニシ総体ノ位置ヲ定ム九五寸許ノ魚ナレバ魚ノ周圍七八分許ノ距離ヲ明ケ置キ高サ二寸五六分許ニ粘土ヲ以テ圍ヒヲナス而シテ油ヲ筆ニ着ケ魚ノ全体ヲ残リナク塗ルベシ但シ油ノ製法ハ次ニ挙ク

粉末ノ煉リ方ハ水ニテ解キ十分攪セ紙表具ノ糊ヨリ少シ軟ナルヲ度トシ之ヲ魚身ノ上ヘ流シ込ムベシ但シ水ニ煉ルトキハ忽ナ塊トナルノ性

東京大学総合図書館

ナレバ最迅速ヲ要ス後三四分時モ其儘置キ右粘土并魚ヲ取放ス時ハ凹型(メガタ)ト成ル尚之ヲ風氣流通ノ所ニ置キテ十分乾カシメ尤缺損セザル様ニ注意アルベシ「或ハ各所又全形ノ内部ヘ兼テ銅線等ヲ備ヘ置キ堅固ナラシメ又ハ紙素(カミスサ)ヲ粉末ヘ加ヘテ保存スルニ便ナラシムルヿモアリ

右ノ凹型ヲ以テ真形ヲ摸スルニハ是亦前同様ノ方法ヲ用フベシ但シ凹型ノ魚身ニ觸レザル様ニ其周圍ヘ粘土ニテ高サ七八分厚サ五六分許ノ小堤(コドテ)ヲ築キ置キ其凹面ヘ十分油ヲ塗リ然ル後ニ粉末ヲ煉リ流シ込ミ而シテ凡半時間モ過キ十分堅塊トナリタルヲ見テ取放ツキハ魚ノ真形ヲ得ルナリ

取放タル魚形ハ尚適宜ニ乾燥セシメ板ニ着ケ懸クベキ様ニナスベシ但シ生時ノ色澤ヲ與フル為メ豫メ用意セル画圖ニ照シテ着色セル上又光澤ヲモ與フベシ或ハ油画具ヲ用ルモ可ナリ又眼ニハ硝子製ノ眼睛ヲ嵌込ムナリ尤モ凹型ヘ流シ込ム時ノ前ニ眼睛ヲ裝置シ然ル後ニ流シ

東京大学総合図書館

込ミ魚形ノ成就シタル頃ハ既ニ眼ノ備リタル様ニナスモ卸テ宜シ
油ヲ塗ルハ全ク互ニ接着スルヲ防ク為ニシテ其油ハ尋常品ニテハ十分ナラザルヲ以テ一種ノ油ヲ製煉スベシ其法ハ尋常ノ白石鹸一斤菜子油半斤剥蔦亜斯四半斤ノ割合ニテ製ス尤石鹸ハ小刀ニテ削リ細カニシ少許ノ水ニテ溶解シ後三種ヲ合シテ鍋ニ入レ火ニ上セ十分混和シテ不溶解物ノ全クナキニ至ル但シ適宜ノ軟度ハ粘タル油位ヲ度トシ貯ヘテ用ニ供ス尤用ルニ臨ミ堅キニ過ルトキハ油ヲ交ヘ適宜ノ度トナシ用フルヲ可トス

右ハ高野則明筆記ノ草稿ヲ校訂増加シ記スル所ナリ

明治十一年二月二十一日　田中芳男

勧農局ヲ廃シ [illegible]

[illegible]

前文ヲ以テ竹本要齋氏ニ示スニ油ノ製法尚十分ナラザルノ辨シ
左ノ一文ヲ贈ラル
石鹸、油、ポッタース三種ヲ合シテ鍋ニ入レ火ニ上セテハ却
テ混和セズ各分レテ粘油トナルコナシ因テ初ニポッタース
ヲ水ニ煮テ溶解シ後ニ石鹸ヲ入レ溶解スルヤ否火ヨリ
下シ稍放冷スルヲ俟テ油ヲ滴シテ粘油トナス但シ
濃淡ハ用フルニ従ヒ單ニ水ヲ以テ自在ナラシムポッタース
又ポッタースノミ煮テ溶解シ用ヒテ足レリ此法甚タ
簡便ナリトス

又竹本氏ヨリ左ノ條ヲ示サル
一 義布斯モシ凝結軟ナル硫酸ポッタアスヲ滴スル片ハ
堅牢トナル
一 義布斯ノ凹型ヲ生明礬並汁ノ抱和液ニ再三浸
セバ堅牢トナル
一 義布斯ノ再用ヲナスニハ能ク水気ヲ去リ而シテ
硫酸ポッタアスヲ和スレドモ原質ニ復ス
一 石膏ノ透明ナルハ義布斯ニ用ヒテ却テ下品ニシテ
不透明ナルハ上品ナリ是ハ硫酸ト石灰ノ量
ニ因ル者カ

雪花石膏ノ説（工業新報ニ掲載）

明治九年ノ秋舊勧業寮ノ命ヲ受ケ武田昌次氏ノ甲斐ヲ巡廻スルヤ歸ルノ日同國雨畑村硯工ヨリ一種白色ノ軟石ヲ得テ歸レリ因テ右硯工ヨリ尚若干ヲ得テ試験及ヒ彫刻ノ用ニ供セントス然ルニ右硯工ハ産地ヲ秘シテ人ニ傳ヘザルヲ以テ山梨縣第二課ノ官員ニ問ヒ尚他所ニ産スルヲ知ル茲ニ於テ同課ヘ依頼シ右ノ砕片ヲ得タリ之ヲ檢査スルニ全ノ雪花石膏ナリ雪花石膏ハ素ト尋常ノ石膏即チ結晶石膏ト同ジク含水硫酸石灰ニシテ唯結晶セザルノミ

因テ彫刻及焼粉ニ用フルニ果シテ良好ノ品位ナリ

石膏ハ焼テ粉末トナシ水ニ煉レハ忽チ塊トナルノ性アルヲ以テ陶磁器及ヒ鍍金銀銅器等ノ模型トナシテ他ニ代ユヘキナリ又生物及ヒ器物ヲ模シ壜口ヲ封シ缺損ヲ脩繕スル等ノ外肥料トナス効用アリ

本邦各地石膏ノ産アレ𪜈運輸ノ不便ナルヨリシテ價ヲ増シ却テ支那石膏ノ廉（壱貫價拾弐銭位）ナルニ及バサルヲ以テ常ニ輸入ヲ仰ゲリ昨十年内国勧業博覧会ノ際宮城県ヨリ出品スル陸前桃生郡宮崎村産ノ石膏ノ如キ品位上等ナリト雖モ運輸十分ノ便ナキヲ以テ其價到底輸入品ニ比シ難シ

石膏粉ヲ以テ模型ヲ作ルノ業ハ近年次第ニ開ケ頗ニ石膏ヲ需用スルニ至レリ然ルニ甲州産雪花石膏ヲ發見スルノ上ハ舶来ノ石膏ヲ用ヒズ必ス甲州産ノ品ヲ用ヒバ国益百分ノ一ヲ成スニ至ラン実ニ甲州ハ富士川ノ舩便アルヲ以テ東京ヘ来着ノ費用ヲ算スルニ舶来品ノ三分一ヲ以テ足レリトシ又其品位ハ舶来品ノ上等（透明セサル者）ナル者ト異ルコトナシ就テハ世ノ石膏粉ヲ用ユルノ人ハ本邦ノ雪花石膏

ヲ用ヒテ外来品ニ代ヘンヿヲ希望ス

明治十一年二月二十八日　田中芳男記

本説ハ工業新報第十六號ニ出ス

明治十年中新門町陶器製作所ニテ此石膏遣送ノ事ヲ

山梨縣ハ依頼シニ當時礦脈廣クシテ此時採礦着手ヨリ二百

五拾九貫目余ニシテ断脈セリ

同年十一月中留雅四郎甲斐國[illegible]巨摩郡三里村ニテ

同質ノ雪花石膏多量ノ産アルヲ見出シタリ

甲州産（南畑ヶ村）白石ハ

硬石膏 Alabaster ナリ石膏ト同性分ニシテ

含水硫酸石灰其分量ハ（$CaSO_4+2H_2O$）只ハ石膏

ヨリ質緻密ニシテ結晶セザルノミ

信州産石炭ハ

石炭礦山ノ外面ニシテ而シモ褐炭ナリ

出下タニアルモノ石炭ナラン

還月陽越シ甲斐豊国村産ノ
白石ト唱フル鑛石試験有之
右ハ全ク無水硫酸加爾基ニシテ白堊ノ
産スル地ニ多ク参雑スル鑛石ニ而
與合水分ハ即石膏ニシテ其用有
之ヲ得其無水分ハ全ク実用無之
彫刻其ニハ一切成否適用サル可キ哉

白石 并ニ石灰

鳴門氏曰八代辺ノ海濱ハ白石多シ皆白色大理石ナリ此石ハ割テ建築ニ用ヒ又器物ヲ製スレモ火藥ヲ以テ割リ石灰ニスルヿ最多シ殊ニ河崖又海辺ニ石灰製所アルニヘ運送モ至テ便利ナリ

右取調及御報申上候也

二月七日　伊東[illegible]

塩田真殿

内務省

蛋白石 Opal

蛋白石ハ石英属中含水硅酸礦ノ一ニシテ即チ硅酸百分毎ニ
十分ノ水アル者ナリ其形ハ定形ナク或ハ塊形又ハ鍾乳形ヲ
ナス光澤ハ脂ノ如ク色ハ白、黄、紅、褐、緑、灰等アリ硬度ハ五、五ヨリ
六、五ニ至リ畧重ハ六、五ヨリ二、二一ニ至ル蛋白石ニ二種アリ其一ハ木化石
ニシテ純硅酸ノ代リニ含水硅酸ノ走入シテ蛋白石ヲ成ス者ニシテ往々木理
ノ分明ナルアリ之ヲ木蛋白石 Wood opal ト云ヒ又其二ハ通常蛋
白石ハ木理ナク或ハ各種ノ雑色ヲ呈ス其堅サ水晶ヨリ遥ニ脆ク
且ツ婦ナリ

西洋ニテハ匈加利産ノ如キ……

草稿用

伊賀槙生村産ノ如キハ通常蛋白石ナレ氏脂様ノ光ヲ強キヲ以テ之ヲ
脂蛋白石 Resin Opal ト名ケルナリ
本邦ニテ従来膏薬石ト唱ヘタルハ此蛋白石ノ黄褐色又ハ焦黄色
ニテ外観恰モ膏薬ノ如ク見ユル者ヲ云ヒ一般蛋白石ヲ指シ云ル
偁ニハアラズ
瑚用ハ石質美良ニシテ裂痕ナキ者ハ磨ニテ緒メ或ハ扣鈕ノ如キ各種
ノ飾具ヲ製スベシ

明治十三年九月

武藤寿記

加里長石又通常長石

Orthoclase Common feldspar

伊豆三宅島ノ噴火砂中ヨリ得タルモノトテ田中公ヨリ結晶石三個ヲ送リ鑒
定ノ命アリ之ヲ検スルニ全ク加里長石ニシテ晶形ハ斜方底斜柱ニ属シ直径
寸許ノ群晶ナリ其形ノ分明ナル者ハ斜方底斜柱ナル単形ノ柱身ナル
二稜ハ缺乏シ他ノ二稜ハ直角ヲ存セリ底面モ亦一稜ヲ缺乏ス其
他ノ晶ハ皆ナ双合形ニ属シ分明ナラス分面ハ酸化鉄ニ因テ黒色ヲ染
ム思フニ當初ヨリ岩中ニテ結晶シ後チ其焼石ノ分解ニ因テ出ル者ナルベシ
此長石ノ劈面ハ白色稍透明ニ近クシテ玻璃光アリ

明治十三年九月

武藤寿記

鴨川石　陶工久樂弥助云鴨川石ハ赭赤にして
光澤ある此の石を焼き粉末となし黒色樂焼
の薬となす其の色黒漆の如し産所鴨川の内
にても今出川口より丸太町を上品と為す

此項写ヲ以テ穀部ヘ入ル

此品即今之を無し五月まて採り得へし

安字ニ用ル野州ノ石ト称スル者ハ何様ノ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]〇貳三之[illegible]
[illegible]
[illegible]

明治四年
京都在勤 林同海翁ニ依頼シ取調ベテ
乞フ返事ニシテ 其実物ハ各科ヘ渡シテアリ

多田親愛奉職行ノ時伝聞買[illegible]石

記

一 カナボ石 貳

産出地名

〇大和国添上郡奈良春日野ニ而
川上ニ而雑[illegible]ニ而出ル

風方

一 〇石恒 硅石 [illegible]

一 小床石 貳

産出ノ地名

○大和国添上郡中ノ川村ノ山

用方

○白色ト灰色ト青色ヲ帯ルト二種アリ

白色ナルヲ専ラ燈籠ヲ造ル原ノ石ヲ

出ス但シ春日神社ノ燈籠ハ多ク此

石ヲ以テ造レリ

○青色ナルハ多ク(?)〆ル五輪燈

籠ニ造ル又茶碗ヲ出ス例ノ多ク

溝蓋ニ造レリト言

右明治九年七月采石

明治十一年九月青森縣八等屬
平井臣親縣納鑛物ヲ撿シ同氏
エノ答辨
一白土ハ火山中ヨリ発出セシモノニシテ火山ノ
作爲ニ因リ浮石等ノ微末ニ分解シテ成ル所
トス故ニ成分モ亦硅酸礬土ヲ主成分トシ其
外多少ノ他物ヲ混ズ火山灰漢譯ト稱スル者則
之ナリ但現今工部省ニテセメント煉製ニ便
用スル火山灰ト稱スルハ全ク之ト異ナリ火
山石中ノ一種ラバト名クル褐色ニシテ浮石

ノ碎塊ノ如キ者ナリ

一火山灰ノ下層ヨリ出ル炭ハ惟ニ嘗テ火山タリシ木質ノ火熱ニ因テ焚焼シ地中ニ埋没スル所トス

一浮石ハ尋常販賣スルモノト比較スレハ外面ノ粗糙ヲ覺ユレ共全ク未ダ水中ニ浮ビ磨礪ヲ経ザレハナリ故ニ外形ハ違フト雖モ其質ハ異ナルヿナシ金石學第二百九葉ニ出ツ

一白石ハ全ク硅石ト同シ如斯ク円粒ヲナスハ各地ヨリ碎塊ヲ散シ或ハ川中ニ流レ遂ニ海邊ニ逼寄セラルヽニ至ルマデ逐吹磨礪ヲ経テ粒状トナル金石學第二百一丁硅石ト同質ナリ

一白砂ハ水晶ノ分解セルモノナリ此透明ナルハ以テ盆玩等ニ敷キテ美観愛スベシ金石學第二百二丁水晶ニ出

一白砂利石此岩石中ニ狹マル小粒ナルハ瑪瑙ニ非ス即チ玉髄ナリ金石學第二百四丁仏頭石ニ出

一猩々石ハ金石學第二百三葉ニ出ル鉄石英ニ同ジ用法美ナル者ハ磨シテ飾具ニ供シ或ハ盆玩

苛ニ敷キテ佳ナリ

一温泉滓ハ石灰礦ノ属ニシテ炭酸石灰ノ凝結シ成ル所トス斯ノ少シク褐色アルハ全ク酸化鉄ノ為メ染色セルナリ金石学第二百五十二丁鐘乳石ト同シ

一石鹸土ハ硅酸若土礬土及ヒ水ヨリ成ル土質物ナリ用法ハ洗浣ニ用ヰテ石鹸ニ代ユベシ

明治十一年九月

武藤壽記

九一九

アラキダワチ　十二年七月

武藤壽記

東京ノ北部三谷村ノ邉ヨリ「アラキダ」ト名クル一種ノ土ヲ出ス之ヲ以テ家屋瓦下ノ置キ土トシ或ハ他ノ土砂ヲ混淆シテ壁ノ中塗トシ又ハ竈ヲ造ル等ニ供シ最モ良好ナル者トス專ラ泥工ノ使用スル所ナリ又其種ノ内良質ヲ撰ミ今戸ニテ従来土器ヲ製スル品則是ナリ此土ヲ出スノ地ハ近傍（今戸）ヲ以テ多ト為セ就中良品ト認ムル者ハ三谷村ノ田地ヨリ出ス者ナリ其所僅カニ方二三町ニ過キス（維新前旧政府ヨリ注文セシ土器（内ニテ焼ケル）ハ必ス此地ノ土ヲ用ヰシトニフ）然レモ毎年アラキダヲ以テ種々ノ用ニ充ルコト頗ル莫大ナリ僅ロシ田地ヨリ採出スノミニテハ需用ニ足ラサルヲ以テ三谷村附隅田川ノ西岸ヲ始メトシ夫ヨリ北走シ川岸ニ沿ヒテ元木村邉

ハテ蘆茅ノ生スル所俗ニ之ヲ茅野ト云フ所ヨリ年々出ス事多シ
ナリ其土ノ色ハ最初採出ス時ハ暗黒色ニシテ黄褐ノ細点アリ燥ケハ
灰色ニ変スル性粘力強クシテ緻密ニシテ之ヲ壓スレハ能ク密
接固着シテ乾カスモ其量ヲ減セサル又亀裂ノ憂稀ナリ
トス
今アラキダヲ擦スルニ質不純ナル粘土ニシテ有機分ヲ含ム事極メ
テ多ケレハ土質常ニ密ニシテ粗質ノ土砂ヲ混淆セサ
ルニヨリ諸種ノ需用ニ充ツル所以ナリ則其成分ヲ擧
ルモ概子左ノ如シ　（其外有機分多シ）
硅酸。酸化鉄。礬土。加里。硫黄。石灰。曹達等

肥料用砂土

明治十二年十二月九日　田中芳男記

従来鑛物ヲ以テ肥料ニ用ウル事ハ唯石灰ノミ
西洋ニテハ近年燐酸石灰鑛ヲ肥料ニ用ル事ア
発明シテヨリ其鑛石ノ発見亦多シト云フ　明十一年
勧農局鳴明壽民虫害防禦ノ為メ九州地方巡廻
ノ節携帰ル所ノ肥料用砂土二品ヲ恵ル即チ左
ニ名称産地形状ヲ挙ク両種共ニ肥料ニ適スル者ナリ
五島ノ肥砂ハ海濱ノ砂ニシテ同島福江ヨリ凡ソ
四里半隔タル岐宿村辺ニアル由灰茶色ノ軽
キ片状ノ細砂ニシテ全ク介殻ノ風化分解セル者ト

是ニ精研スレハ珪石砂ヲ交リ之ヲ見ル稀ニシテ多クハ
介殻[illegible]ノ細屑ト是ヘ各色一定セス形モ亦一ナラス
一 薩州ノ肥砂 但シ地表ト二層目ニアリ此砂多キ所ハ
日置郡 隅州ノ姶羅郡ノ由 是ハ全ク火山ヨリ
噴出ス焼砂ニシテ其質浮石ニ近ク色ハ鼠色ナリ原来
塊ヲナシテ已ニ採レハ容易ニ砕粉トナル是ニ指ニ觸テ甚
粗糙ナリ 是ハ長石ノ分解スル多ク亜爾加里ヲ合ムヲ以テ
嘗テ稍塩味ヲ覚フ
右両砂共ニ牛馬糞尿等ト共ニ堆肥トシ烟草ノ肥料ニ
用ウル由 鳴門氏ノ説ナリ

石脳油ノ効用 英國刊タイムスト名ル新聞紙ヨリ抄出ス

此油ハ一種天造ノ山物ニシテ其効用明ナラズ只コレヲ焚シテ燈ニ代ルノ議論アレ𪜈其説モ尚或ハ之ヲ辯駁スルアリ或ハ之ニ左祖スルアリテ一定セザリシニ近日ノ發明ニ據レハ此油最能ク人身ノ寄居體（譬ハ寄生ノ樹幹ニ在ルカ如キヲ寄生体ト云フ 按ニ蚤虱ノ類）ヲ駆逐ス加之此油ヨリアニリ子ヲ製シ出ス可キノ理ヲ發明セリ元来アニリ子ハ世上ニ知ル如ク藍靛中ノ一成分ニシテ甚鮮美ナル薔薇色ノ画料ナリ是ヲ製スル常方ハ上好ノ藍靛

ヲ啢哷沙ノ濃キ溶液ニ和スレハ即チ褐色ニシテ油ノ如キ物ト成ル扨是ヲ蒸餾スレハ透瑩無色ノ液ヲ淂此液即アニリ子ニシテ香氣酒ノ如ク味甚苛烈侵蝕ス此アニリ子ヲ以テ製シタル鹽類ハスベテ無色ナレ𪜈空氣ニ觸テ速ニ薔薇色ヲ帯タル黄色ニ変ス或ハ試ニ白色ノ木片ヲアニリ子鹽ノ溶水中ニ投スレハ輙チ深黄色ニ変ス鹽酸ハ能ク此鹽ヲ種々ノ色ニ變セシム但シ甚稀稠ニ隨テ或ハ緑色或ハ藍色或ハ黒色トナル然ルニアニリ子ノ價廉ナラサルヲ患ヒトセシニ近来ノ試驗ニ賎價ヲ以テ石脳油ヲ化シテアニリ子ヲ製シ出ス可キヲ徴シ此試法必ス効ヲ奏ス可シト云リ又此油ヲ以テ揮發芳香ノ亜的兒ヲ淂可ク并ニ此油ヲ石炭或ハコーク（焦煤）煅キテ瓦斯分油分ヲ除キタル石炭ニ代テ蒸氣械ニ用フベシ

柳川春三補譯

○

石脳油 *Petroleum, Oleum petrae, Oleum gabianum, Bergolie, Peterolie.*

博物局

今尋常藥舗ニ出ル品二種アリ「ナフタ」卽白色ノ
者ハ甚稀ナリ是波斯ニ產シ此地ニハ右ノ油ヲ
含ムユヘ地ヲ低ク堀テ置ハ自然ニ其內ニ溜ル
ナリ

尋常卽褐色ノ者ハ「カープフルジス」島ノ海ニ浮
ヒ出ツ其外「ピアセニス」邊ノ「バルス」及ヒ「モデナ」
ニ於テ「ランゲドク」ノ「ガビアニ」村英國并亞細亞
亞墨利加ノ諸部等ヨリ出ツ總テ火山ノ邊ニ石
炭アルノ地ヨリ出ルナリ或ハ又岩石ノ罅隙ヨ
リ滲出ス

石油ハ是自然ニ石炭ノ乾餾セラレテ生スルモ
ノナレバ今人工ヲ以テ之ヲ擬造スルモ亦同質
ノ者ヲ得ベシ

純精ナル眞ノ石油ノ性質ハ色臭味共ニナク甚
タ速ニ燃燒スルモノナリ然レトモ今通常商賈ノ
取扱フ所ノ品ハ僅ニ透明ニシテ多少帶青ノ黃色
ヲナス（殊ニバルバドス出ノ品ハ赤褐色ニシテ
甚下品ナリ）原來ノ石漆臭ヲ具フ其異重ハ大低
八十五ニシテ純精ノモノハ七十五ナリ
青色試驗紙ヲ赤色トナシ煑沸スレハ褐色ノ物

ヲ残ス之ヲ燃セハ光輝ヲ發シテ燃ヘ煤多キ缺
ヲ揚ク
右ニ挙ル買物ノ石油ヲ蒸餾精製スレハ大抵無
色ノ油ヲ淂テ殆ト天生上品ノ「ナフタ」ト大異ナ
キモノヲ淂ベシ
空氣ニ觸レハ次第ニ暗色トナル水ニ溶解セズ
シテ上面ニ浮フ「アルコール」「エテル」「ヱーテル」性
油ニ溶解ス硫酸及硝酸ノ冷ナルモノニ入リテ
和セス温ムレハ僅ニ和スルノミ
純精ナル石油ハ多ノ油ヨリ成ルガユヘニ唯炭
素ト水素トノ二個ヲ含ム
ヘッス氏曰百分ノ石油八十六分ノ炭素十四分ノ
水素ニ成ル
不潔ノモノハ右ノ分量ニ異リテ外ニ松脂様ノ
物ヲ混ス
松節油(テレビン)或ハ賦性ノ油ヲ混シ擬造セル者ハ容易
ニ之ヲ驗シ淂ベシ即松節油ハ劇ク之ヲ温テ之
ヲ知リ賦性油ハ硫酸ニ由テ黒色トナルナリ
石油ハ少ノ酸素ヲモ含マザレバ「ボッタシユム」「ソ
ジウム」等ノ如キ烈ク酸ニ和スル品ヲ貯ルニ

最適當ス又此油ヲ産スル國々ニ於テハ光ヲ
與ル丁ノ用ニ供セリ

金石略ニ入ルヘキ事務

元素之表

○符ノ書ハ多ク金石ノ成分ヲナス者ナリ

非金屬

○	酸素	養氣	養	Oxygen	Oxygenium O.
○	硫礦	礦	硫黄	Sulphur	Sulphur S.
△	損列紐母	硒	西里尼恩	衡	Selenium Se.
△	的律僑母	碲	腿羅里恩	衡 黄衡	Tellurium Te.
○	塩素	綠色素 格魯林	塩氣 綠氣	綠衡 Chlorine	Chlorium Cl.
△	臭素	蒲盧民 溴	衡質 東羅名	Bromine	Bromium Br.
△	沃顛	紫素 海藍	碘	Iodine	Iodium I.
△	衡素	華律阿林	弗	夫羅而林 Fluorine	Fluorium F.

○	窒素	硝気 又 淡気 淡	Azote Nitrogen	Nitrogenium	N.
○	燐	光藥		Phosphorus	P.
●	砒	信石 僊	Arsenic	Arsenicum	As
●	安質母尼	安的摩尼 暑地摩尼	Antimony	Antimonium Stibium	Sb.
○	炭素	炭精 炭	Carbon	Carbonicum	C.
△	硼素	硼精 硼 布而倫	Boron Borax	Borium	Bo
○	珪素	玻精 玻 久里西恩 衞	Silicon	Silicium	Si.
○	水素	軽気 淡気 軽 術	Hydrogen	Hydrogenium	H.
	輕金屬				
○	加里素	加僧母 ト對斯恩 灰精 鉀 衡 鋧金		Kalium Potassium	K.
○	曹達素	曹胃母 鹼精 鈉 衞 素地恩		Natrium Sodium	Na
	利知烏母	鋰		Lithium	Li.
○	苦土素	麻倔涅叟母 美合尼西恩 鎂 嘧吧哂金		Magnesium	Mg.
○	石灰素	加爾叟母 石精 鈣 丐而西恩 灰金		Calcium	Ca.
○	重土素	抜留母 鋇 貝而以恩		Barium	Ba.
○	斯多論胃母	鍶 息脳浪西恩 衎		Strontium	Sr.
○	礬素	礬精 鋁 衰盧彌尼恩		Aluminium	Al.
△	別利弁僧母			Beryllium	Be.
△	攝僧母	鏴 昔而以恩		Cerium	Ce.
△	朗答紐母	鑭 浪替尼恩		Lanthanum	La
△	壹多僧母	鐿 以特里恩 衞		Yttrium	Y.

△	[illegible]爾個紐母	鋯　衡　入爾康尼恩		Zirconium	Zr
△	多暦母	釷　灰金		Thorium	Th
	重金屬				
△	格魯密烏母	鉻　灰毛金　容羅瑪恩		Chromium	Cr
○	鐵		iron	Ferrum	Fe
	亜鉛	白鉛　倭鉛　精鈏　鋅	zinc	Zincum	Zn
○	満俺	錳　紫石　孟葛尼斯	manganese	Manganesium	Mn
	箇抜尓篤	鈷　苦抱尓	cobalt	Cobaltum	Co
	蝋結尓	鎳　新白金　泉客尓	Nickel	Niccolum	Ni
△	烏刺紐母	鈾　衝　由日尼恩		Uranium	Ur
4	錫		Tin	Stannum	Sn
△	金	黄金	Gold	Aurum	Au
△	白金	鉑		Platinum	Pt
△	巴刺胃母	鈀　鈀留底恩		Palladium	Pd
	埃利胃母	铱　衣日地恩		Iridium	Ir
	律的紐母	钌		Ruthenium	Ru
△	阿斯謨母	锇		Osmium	Os
△	羅胃母	铑　日和地恩		Rhodium	Rh
○	鉛	黒鉛	lead	Plumbum	Pb
○	水銀	汞　須	mercury	Hydrargyrum	Hg

東京大学総合図書館

○ 銀	白銀		Silver	Argentum	Ag
○ 銅			Copper	Cuprum	Cu
○ 蒼鉛	鉍	别斯未斯	Bismuth	Bismuthum	Bi
嘉度密母	鎘	剳美膀金 開特補恩		Cadmium	Cd
△ 水鉛	莫利貌埵紐母	鉬 目力别敵駝		Molybdenum	Mo
△ 活爾弗剌母	鎢	衡、衡金 東思天	Tungsten	Wolframium Tungstenum	W
△ 華那胄母	錇	衡 凡奈地恩		Vanadium	V
尾阿毯母	鈳				
△ 且答律母	鉭			Tantalum	Ta
△ 智且紐母	鈦	衡 替販尼恩		Titanium	Ti

艾

熊野新宮鑛石目録

一 キンツ 捨ト云 熊野方言不用ニシテ捨ルノ義

二 ドサ 即石灰石

三 ヤケ 無烟石炭殻

四 ハブ

五 要鉑 即硫化銅

六 銛 同

七 カラミ 即吹滓

八 キンツニスリ合鉢ノ品 捨ト云

九 失名ノ鑛石

通計九品

十 一木葉石

以上

十一 一植物ノ肥シニ用ル土 伊豆韮山近辺産 実験セシニ効アル由

十二 一同 韮山産 宇都宮試ニ酸化鉄ヲ多ク含ミ又加児機ヲ含ム様子ナリト云

辛未九月薩州長東叢所献

十三 一アカゲヤキ木材

十四 一アマキ并同材ニテ造ル魚、

十五 一フクキ并同材ニテ造ル魚及ヒ枝

十六 一石炭ニ硫化鉄ノ着キシモノ 唐津産

明治三年庚午十一月分　内田正雄献品

十七　一介類　四百品

十八　一化石類、　四重

明治四辛未六月十九日　内田中博士献品

十九　玉髄　十一品
廿　石英　八品
廿一　瑪瑙　三品

廿二　鑛石類　十三品
廿三　カナノチル　二品
廿四　萸紋石　二品

廿五　西洋石　二種
廿六　太乙餘糧
廿七　石蛤　七品

廿八　介化石　五品
廿九　石螺　五品
卅　月ノ下リ

卅一　鐘乳
卅二　モンベロ石　数片
卅三　方解石　五品

卅四　トクサ珊瑚
卅五　琥珀　和産
卅六　土殷孽

卅七　石弩
卅八　石牙
卅九　木化石　五品、

四十　埋レ木　六品
四十一　化石　三品
四十二　木葉化石　五品

四十三　ホワス介
四十四　石膏
四十五　ヘイサラバサラ　鮓答

四十六 井泉石 二品　四十七 寒水石　四十八 古尾 二品

甲州山梨郡團子洗村　越中富山山崩ヨリ出ル物

四十九 團子イシ　五十 土瑪瑙　五十一 螺類 二十二品

五十二 蛤類 二十五品　五十三 日月殻　五十四 巾着カイ小ナル者

五十五 牡丹イシ 三品　五十六 蛇介 二品　五十七 サクラ貝

五十八 宝カイ 大小四　五十九 石梅 二品　六十 牡蛎

六十一 箱フグ　六十二 亀甲 二品　六十三 小石類

六十四 砂類

通計百六十六品　外ニモンベツ石数片

六十五 安質母尼鑛 二

六十六 孔雀石 二

六十七 同 銅山之産

六十八 同 國府之産

六十九 同 國府之産水銀鑛ノ如キモノヲ混セル品

七十 銅鑛 大小二

七十一 硫化安質母尼 溶シタル者

七十二 大理石 和産

七十三 黄玉髄（ヲーパール）

七十四 水銀鑛

七十五 土殷蘖

七十六 硫化銅

七十七 水榨器ニテ製セシ火薬

七十八 硝石餅

七十九 上製硝石

八十 中製硝石

八十一 砂様硝石

八十二 管硫黄

八十三 上品 蒸溜硫黄

八十四 同下品

八十五 硫黄花

八十六 霧島山明礬山産硫酸

八十七 硫黄ヶ島産硫黄醋

八十八 火薬ニ用ル木炭并未タ焼サル楊ノ枝

外 目録ニ不載鑛石類二十七品

宇和島

東瀬山鉛鑛、

同　銅鉛交リ鑛石

鹿角山内キハク鑛石

カラフト産鑛石　數品

硝酸ヲ取リシ跡ノ礬紅

尾張産箔土

尾張瀬戸産紺青　即コバルト

薩摩限之城郷ノ内薩摩山芹ケ野金山ノ金鑛

加籠金鑛、

大隅國横川郷之内山鹿野金山金鑛、

日州野尻紙屋山産硫化安質母尼

鬼界島産爐甘石　水飛セシモノ

硫化安質母尼　溶解セシモノ

管硫黄、

川内芹ケ野産禹餘糧ノ類

一八品

紀州熊野産

一無烟石炭

一ハブ銅鑛

一ヤケ　無烟石炭同物ナルベシ

一同一種　軟ナル者

妙法坑石類之内
一要鉛

一キンツ二品　硫化銅

一ニヌリ、キンツ合物

一鉛鑛

一ロッツ　炭酸石灰

一鑛石吹滓 三品

一十品

一薩州硫化安質母尼 吹タル者

一飛州益田郡阿多郷村ミサカ谷鑛石

一同高山縣留轄加賀澤村鑛石

一同加賀澤北側鑛石

一四品 辛未九月八日宇都宮大助敬拝参

宇飯濱産烏水晶

深浦鷲ノ澤産黒瑤石 為玉不透明

小泊ノ産 方言黒クニロク 黒瑤石ニアラス別種ノ石ナリ為玉薄黒色ナリ光澤透明

螺ノ化石 二

尾太銀山産安質母尼鑛ノ

安モン岳産銅鑛

尾太銅ノ山色

同 鉛ノ山色

中里不動ケ瀧産石緑

同砂 二品

下前海濱産紫石脂

八代石ニ似タル石

茶色砂

外ヶ濱平舘産白土

大澤産瀬戸土

三ッ内村領赤根澤小渕出茶土

同勝地産茶土

早瀬村領御山出薄（雲母）萠黄土

一ノ渡村領御山出紫土

小栗山村領御山出薄萠黄土

桐馬村領御山出白土　緒布木綿ノ類油垢洗濯髪洗ニ用

黒色石

一　卅四品

奥州金華ノ鑛石　一

野州茂本領硇石　一

日光山邊銅鑛類　一

福山留岩　備後砂　一

自然銅　一

遠州螢石　一

美濃赤坂金生山産螢石　一

佐久間一郎贈螢石　二口

濃州螢石　田新十郎所贈　一

加州螢石　一

東京大学総合図書館

一 モンベツ石

一 鑛石

一 武石

一 紫石英

一 豫州宇和島銅

一 越前浄法村鳥谷金山石

一 越前黒石 ブロインステーン？

越前歸リ山村ノ黒石ハ所々鉛リノ如キモノ現ス

越前小黒兔村金山石

越前細呂木村字根村良當谷出ス

越前奈良瀬村鑛石

越前鑛石

越前西畑村鑛石

越前謡谷村千年瀧岩中ニ生ズ鑛石

越前山竹田村六角石 白石英ノ如ク白色ニシテ結晶ノモノ質堅シ

出処不知鉛鑛

火浣布石 高畠五郎所贈

美濃赤坂金生山産方解石

美濃産 安質母尼

鉛山石中ヨリ出ル者

藝州化石　古賀居ノ所贈

甲州水蛭石　島田吃郎所贈

加州産ブロインステイン

筑前金礦　村上氏所贈　ゲデーゲンゴート

勢州亀山ノ産

信州産黄土

産地不審　島氏所贈ノ鑛石

産地不審　焼石

産地不審石蛤

薩州産朱石

薩州産土

筑前金山生入石

筑前侯所贈鉛卝

筑前侯所贈鑛石

筑前侯所贈銀鑛瓦

巳年堀初有馬卝

山田舟生山鑛

大野銅鑛

同　鉛鑛

越後國蒲原郡間瀬銅山之山色

越後國間瀬銅山ヨリ出ルバカ

土州金銀山産無名異

蒼鉛舩 蒼鉛中ヨリ出ヅ質ヲセサヱ入ル者乎

但馬國鑛石

天受山中鑛石

菊盛山鑛石

珠盛山中鑛石

太盛山中鑛石

珠盛山下鑛石

天受山上ノ鑛石 銀銅分ル

万盛山鑛石

天受山上鑛石 (銀銅)

天受山下鑛石

太盛山下鑛石

太盛山上鑛石

珠盛山 銀鉛亜鉛

以上但馬ノ鑛石

墨利堅米

メリケン献上「テレガラーフ」ノ「ワラート」ニ塗リタル「ガオウトレユッグ」

亜米利加船初渡ノ時神奈川ニテ得ル
英人天祐丸ニ残シ置タル候物
コーセニール
[illegible]
ヤマグスイスグス樹実ナリ上野ニ在リ慶應元
年閏五月廿六日ヨリ数日之間降リタル木ノ実
ナリ
土井侯ヨリ被下候銀粉ヲ消酸ニ溶シタル時沈
澱シタル者ヲ吹分タル者〇ドル銀ヲ粉ニ為シタ
ルナルベン
筑前侯所賜カオウトショウク
蝦夷ニニレンノ子

明治四辛未年五月二日川本幸民ヨリ来ル

化石場所

明治十年三月廿日照僧町川岸所渡ノ
堀割内ニ於テ仲ケ島ヘ取ス棟ニ築キ掛ケ候節
十丈余堀リ下ケ候テ六丈余埋マリ居リ砂交リ黒キ
ネバリアル土中ヨリ右之人骨堀出ルヽカ如シ
明治十年三月

千葉縣下第十一大区十一小区
市川駅六十七番地
届出人 深谷伴助
右所有人 同町六十六番地
受請人 伴右衛門

砒石鹸製方

生石灰　一匁　酒石塩　二匁

白石鹸　四匁　細末砒石　四匁

樟脳　五匁

通計五品

先樟脳ヲ粉末ニスル為ノ火酒ヲ加ヘニユウ鉢中ニテ摺リ而シテ酒石塩并細末砒石ヲ加ヘ一時間ヨリ搗交ヘ其後生石灰ヲ入ル右ノ品々十分混和セシ後細剉シタル白石鹸ヲ入レ能々搗交テ後適宜ノ餅ノ形ニ造リ貯ヘ置ク

植物為
之廣勢譯
以魏中

扱之ヲ用ニトスル時ハ程ヨク水ニテ溶解シ刷
毛ニテ塗ル

砥石目録

荒砥 二品	銚子砥
青砥	天草砥
伊豫砥 質堅キモノ 下品ノモノ	名倉砥
浄見寺砥	大村砥
上州 沼田砥	勢州 名倉砥
欠砥 即三州名倉砥	上野砥
丹州 内曇砥	合砥 大和本山
鳴瀧砥	アカ砥 野州三谷村

河内志征邪
国府仲哀帝
廢陵
允恭帝陵直邪
帝陵ノ間
泉村探甚擬

卅年廢陵トナリテ當
時ハ沙地ヲ耕墾スト云
百姓等沙地ヲ堀リニノ
曲玉等ノ古石ヲ獲
タル由

クラで獨乙化石図彙集ヲ鈔写

三藤井 子田尋 檢了

日光山或ハ日光近邉ニ 産 柱石
山ヲ

石質極メ堅ク色青黒ニシテ光沢
アリ形チ正角或ハ長角六七寸位
長サ七八尺 角並ニ長サ共大小長短アルベシ
茶人ノ家作床ノ間ノヲトシカキナド
ニ用ナリ

右石日光御廟道ニテ見聞不致猶忘ナリ
但日光ノ人ハ稀義セズ又右事ヲ
知ズヨクヽヽ 尚センサクアルベシ

日光何山ヨリ出ルト云フナ不聞
右石テ見ルハ今市宿ト砕石宿トノ
中間ニテ立場之東京ヨリ右側ニテ
醴酒ヤ物スキノ家作イタシ、ツンボ老人
ノヲル不ナリ
○中禅寺湯場ニテ吉見や
○小山駅ニテ角や○日光ニテハ釜や
○今市駅ニテ
トヤ諸亭ヨリ申し　岸本
卜宜しや　僕宿りやれり候

芳男様

緯

第百十九号

鐵道線路諸橋梁並家屋ニ至迄
築造ニ於テ必要之セメント多分ニ入用ニ有之其
外国生産之品ヲ仰キ居ルハ莫大ニ入費も相
嵩ミ候ニ付願クハ内地ニ於テ製造見込ニ候
存候ニ付此度若ニ而思召ニ而純良製品日光近傍ニ
在ル原石ニ就テ石灰石産出之地ヲ探求致候
終ニ当国佐野中ニ於テ大牟田保管ニ相問セメント
灰石産出之場所ニ就テ委細同人ニ
依テ論旨之段此段及依頼候也

明治八年五月十五日　鉄道助[illegible]寅

内務省五等出仕田中芳男殿

追而本文産出之セメント見石為御参考
入御一覧候也

明治四未四月鋳出十七日出
岡田六蔵手書
勢州員弁郡治田郷[illegible]　鑛石類添 十六[illegible]
明治辛未年明治[illegible]年中[illegible]
日々政府[illegible]採掘[illegible]

一筆啓上仕候、然者今般
兼て御依頼之趣致承知
候也、其節御申越候
昨年来時々工部省中より
日本國民之為御教導之

明治八年五月十五日　鉄道助仙生寅

内務省五等出仕田中芳男殿

何分ニも宜御頼候
頂戴仕候處情ニ猶
万ニ萬端ニ多端ニ候
御國ニ而ハ諸侯中も
當地杢佐拙者関ニ候
追啓[illegible]伏[illegible]
中ニハ四十里斗隔り候地
委ニ御承達之段御開被差
猶此ニ可申上度候
右親十二月不事無事務候
去親可申上可度候萬事
[illegible]此[illegible]在之候

一 右様為如此御座候
恐惶謹言

四月朔日　冨田六蔵

伊藤圭介様
田中芳男様
参人々御中

一 篠之風穴鐘乳首之分
一 日光蝋石并ニ場元極
下ホと見られ申候
一 [illegible]

一去月江平田村庄屋申ニ
彼是色々手を尽し相試候処
石炭ニ無之由ニ御座候得共一通
上ニハイハ木同様ニ御座候
一吉野村ニ石炭有之候ヘ
の石炭ニ無之趣申聞候而
御座候
一此節御用向之義ニ付
通被下候ハヽ有難通御座候
一ゝ被下度候

勢多東名主
負兵郡治田新町
尾田六蔵

取次所
東名馬道
豊田屋平兵衛右

東京大学総合図書館